

# 〔翻刻〕『続英雄百人一首』

尾崎 良介 玉田 春香  
保手濱里沙 宮下 淳子  
藤川 功和

## はじめに

『続英雄百人一首』は、江戸時代に刊行された、いわゆる異種百人一首の一つで、嘉永二年（一八四九）に刊行されている。編者は、緑亭川柳（1787～1858）で、水谷緑亭ともいい、江戸期の川柳作者でもあり、五世川柳を襲名している。

緑亭川柳は、弘化二年に刊行された『英雄百人一首』の編者で、本書は、『英雄百人一首』の好評を受けて刊行された『烈女百人一首』（弘化四年刊）、『秀雅百人一首』（弘化五年刊）に続く異種百人一首も

のである。

本書の百首本文については、伊藤嘉夫氏に既に翻刻がなされているが、上欄注も含めた全体の翻刻は未だみえない。そこで、藤原定家撰の所謂『小倉百人一首』の享史研究の一環として、尾道市立大学中世文藝研究会のメンバーで、本書の全文翻刻を試みる。担当者は、以下の通り。

- ・ 序文―尾崎
- ・ 一首目～二十首目―尾崎
- ・ 二十一首目～四十首目―宮下
- ・ 四十一首目～六十首目―玉田

- ・六十一首目〜八十首目―保手濱
- ・八十一首目〜百首目―藤川

### 凡 例

- 一、底本は、尾道市立大学付属図書館蔵本を用いた。
- 一、翻字本文には適宜、句読点を施し、また会話文には「」を、書名には『』を施した。
- 一、字体は通行の字体に改めた。また「左」は「より」に、「と」は「こと」に、適宜改めた。
- 一、行取りは、本文に拠らず適宜改行した。
- 一、底本に文意不通等が認められる場合は、該当箇所右傍に（ママ）を付した。
- 一、虫損等で本文が判読不能な箇所は他本により、その際（ ）を付した。また、他本によつても判読不能な箇所は□を付した。
- 一、百首本文には、それぞれ、①、②…と歌番号を付した。
- 一、口絵では、話題ごとに見出しを「」内に記載した。

### 【翻字本文】

続英雄百人一首序

孟子有<sup>レ</sup>言<sup>ル</sup>曰<sup>ク</sup>聞<sup>ク</sup>伯夷之風<sup>ヲ</sup>在<sup>ハ</sup>頑父<sup>ニ</sup>廉<sup>ニ</sup>懦夫<sup>モ</sup>有<sup>レ</sup>立<sup>ル</sup>志<sup>ヲ</sup>聞<sup>ク</sup>柳下惠之風<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>鄙夫<sup>モ</sup>寛<sup>ニ</sup>薄夫<sup>モ</sup>敦<sup>シ</sup>宣<sup>ナル</sup>哉<sup>盛</sup>徳之化<sup>スル</sup>人<sup>ヲ</sup>也<sup>、</sup>不<sup>メ</sup>俟<sup>ニ</sup>口<sup>ツ</sup>ツカラ論<sup>ス</sup>而教<sup>シ</sup>各<sup>レ</sup>句<sup>遷</sup>善<sup>ニ</sup>矣<sup>無</sup>他感<sup>スレ</sup>之<sup>也</sup>、夫易<sup>キ</sup>感<sup>ニ</sup>動<sup>シ</sup>人心<sup>一</sup>者無<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>我<sup>レ</sup>國風<sup>三十一</sup>言<sup>ニ</sup>己<sup>レ</sup>感<sup>ム</sup>而後能<sup>レ</sup>詠故<sup>ニ</sup>復<sup>能</sup>令<sup>ニ</sup>シムル人<sup>ヲ</sup>感<sup>セ</sup>也<sup>、</sup>深<sup>キ</sup>焉<sup>曩</sup>日<sup>ニ</sup>川柳翁撰<sup>ス</sup>英雄百首<sup>ヲ</sup>既<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>子世<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>続<sup>テ</sup>而輯<sup>ム</sup>是<sup>ノ</sup>編<sup>ヲ</sup>乃<sup>レ</sup>此先哲<sup>之</sup>雅章<sup>也</sup>、若<sup>シ</sup>使<sup>テ</sup>讀者<sup>ヲ</sup>感<sup>激</sup>シテ而転<sup>セ</sup>其心<sup>一</sup>則<sup>レ</sup>自<sup>ラ</sup>有<sup>下</sup>伴<sup>シ</sup>聞<sup>ク</sup>夷惠之風<sup>ヲ</sup>者<sup>上</sup>矣<sup>乎</sup>於<sup>レ</sup>戲翁<sup>之</sup>著<sup>ニ</sup>此書<sup>ヲ</sup>亦世教<sup>之</sup>捷徑<sup>ナル</sup>也<sup>、</sup>哉<sup>刻</sup>已<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>請<sup>ニ</sup>序<sup>ヲ</sup>於<sup>レ</sup>余<sup>ニ</sup>因<sup>テ</sup>贅<sup>シ</sup>數語<sup>一</sup>以<sup>シ</sup>弁<sup>ト</sup>于<sup>レ</sup>其端<sup>一</sup>云<sup>、</sup>

嘉永己酉孟春

武陽 金水需士開口東作識

竜眠書

よつの時いつかへりのさき英雄百首をゑりて梓にせしに、猶是に嗣んことを書肆のこひぬれば、はからずしもことうけせしより、をちこちに事実をたつねいにしへ葦原の乱にしふしに猛きものゝふの旗旗の

下にて風に吹し帷幕に備へて月をなかめしことの葉を寄ぬれと多くふること聞もらし見及さる所もすくなからね、其ちさとの道たとりかたきを人に問ひ悉く求て続英雄百首とそなしぬ、しかはあれと清き渚の玉ひらふともつくることなく枝高きもとつ葉の手もとゝきかねとのこせるたくひ残多きうらみあるやうなれと、みてるを闕るは天の道に随ふにこそと目にふれしことのみをしるし、歌のよしあしはしらねと八島の外波音高き比にもみやひをわすれぬやまと魂を感じ、且錯乱の世のことしらぬ童に忿劇やすまぬ昔をさとし今弓を袋にかくし剣を箱におさむる静けき大御代のおゝんめくみをもしらせまほしく、聊俚語を添て心さしを能ふれと拙にはちて汗顔きはまりなきことにこそ

嘉永二酉の春

応需

□□書

緑亭川柳

鉄石心肝錦繡腸  
功名藻思両涼芳  
干戈世上斯介在  
須愧大平木偶郎

武南 金水釣客題

〔神明の威徳の事〕

我國の古より、神明の威徳を信教するもの御恵をかふむることすくなからず。中にも天満大自在天神は威霊いちじるく、万機を補佐し、文道を守給ふ御神なり。好文木の名ある故敷神慮に別して梅を愛し給ふ。されば神詠にも、

梅あらばいやしき賤がふせやまで

われたちよらん悪魔しりぞけ

また句ひおこせよと詠じ賜ひて、御愛樹も御跡を慕ひ、空をかけりてとびきたるなど、是心誠の不思議なるべし。然るに世も末になり、建久二年の春、鎌倉の武士九州の押領使となり爰に來り、梅の枝を折けるに、其夜の夢に神人あらはれて、

ゝなさけなく折人つらし我宿の

あるじわすれぬ梅のたち枝を

此神詠に彼武士恐驚き、後悔して御詫を申上、丹誠を抽で折りしかは、御咎を免るゝことを得たり。誠の道といへる古き教にそむかず。文雅に心ざしある輩は、うるはしく神徳を仰ぎ敬ひ、御恵の幸ひをねがふべきことなり。

〔右大将頼朝の事〕

右大将頼朝卿世の政事をととりて、文を左にし、

武を右にして、いにしへの法を兼そなへ、敷島の道に心がけ深く、春の花のあした、秋の月夜ごとにつけて物の興廃もしるゝは歌なりと八雲の風を慕ひ、陣中にも詠吟たえず。文治の末陸奥の夷を退治せんと、大軍を卒し名取川を渡り給ふ時、

頼朝がけふの軍に名とり川と詠ぜられ、梶原附よとあれば、

君もろともにかちわたりせん

景季言下に是をつけければ、感じ給ふ事ひとかたならず。かつまた白川の関を越給ふ時、関の明神へ奉幣をさゝげ、景季をめして、「当時初秋へ能因法師の古風思ひ出さるゝなり。一首仕れ」とありければ、

秋風に草木の露を払はせて

君がこゆれば関守もなし

鎌倉どの聞召て、槊を横たへて生死の街にありても、風雅を捨ざるはいと優しと引出物あまたまはりぬ。数万騎の中に一人面目をほどこすこと、歌の徳有がたきことといふべし。

### 〔祝部成茂の事〕

祝部成茂は日吉の社の禰宜なり。承久の乱の砌りに、後鳥羽院の御隠謀に組せしよし申すものあり

しにより、則ち召捕れ、鎌倉に下して誅せらるべきに定りぬ。成茂無実の讒に沈しを歎き日吉の社を伏拝み、

すてはてず塵にまじはる影そはゞ

神もたびねの床やつゆけき

此歌を日吉の神前にをさめさせしに、ふしぎや其夜北条義時の北のかたの夢に、老たる猿一ツ来りて、黒髪をとり、猿の手からみ、鎖を以て北の方の身をいましめ、大きに怒り、「日吉の禰宜成茂罪なき者なるに、囚人たるによりて権現の御咎なり」と言ける。北のかた夢さめて驚き、大膳太夫入道覚阿に此事を申し、頻りに成茂が罪をなだめ、命乞ひありて、ゆるされ帰洛に及びけり。歌の徳神慮にかなひ無実を消して一命を助りしは、いと有がたきことなりけり。

### 〔後醍醐天皇の事〕

後醍醐天皇重祚まし／＼てのち、都は合戦のちまたとなれば、吉野山に入り給ひ、飯宮を皇居として、あらたまの年立かへりても、節会規式のさまもいとかなしく、春もはやなかば過て、御庭の桜もやゝ咲出しを御覧ありて、

爰にても雲井の桜さきにけり

たゞかりそめの宿とおもへど

かく遊あそびしていとわびしく過すせ給たまふに、世の中  
なほも騒さわしく楠くすのき、新田にいつた、名和なわ、北畠きたはたけの諸將等一  
致して、朝敵あそ足利の勢せいを追退おひざめけ、防戦ふせふといへど  
も、さらに干戈かんこの休やする時なく、此皇居このみやに日を重かさね  
給たまふに、折をりしも五月雨さみだれふりつゞき、淋さびしさ増まる山里やまに、  
供奉くぶの人々も袖そでのかはけるひまもなく、雨あめもをやみ  
なくふりつゞぎければ、後醍醐ごだいご天皇筆てんわうふでを染そめさせ給たまひ、  
此こきとは丹生にの川上かみほどこかし

いのらばはれよさみだれのそら

斯詠かくえいじ給たまひしより、忽たちまち空そらはれるのみか日影ひかげうらゝ  
かになりしは、御威徳ごゑとくといひ、御製ごせいといひ、いみじ  
くわたらせ給たまふことを人々みな皆感心みなかんしんせり。  
つるぎ太刀身たがみにとりそふるますらをぞぞ

恋のみだれのもとにもありける

鬼神おにかみもおそれおのゝくくはがたの  
かぶとを着きける武者むしゃとならばや  
かしこくもたねをつたゆるよろひ草

風はふけども身こそうごかね

ものゝふのやなみつくらふ小手のうへに

あられたばしるなすのしのはら

あづき弓ゆみいるよりはやく落おつつる瀬せを

八十うぢ川と人はいふなり

ますらをのやすふりたていづる矢を

のち見ん人はかたりつゝがに

武士の母の衣ころもをこひうけて

しなばかたみと思ふのちの世

風きよくふきたゞよはすしら雲くもは

人をなびかすはたにぞありける

伊予守頼義

① 都みやこには花はなの名なごりをとめおきて

けふした芝しばにつたふ白雪しらゆき

源頼義みなもとのりよしは河内守頼信かわちのりのぶの子にて勇猛ゆうまうの大将也せう。永えい

承二年せうに、奥州おくしゅうへ下向くだむかひし、朝敵あそ頼時よりときを討取うちとといへども、

その子貞任さだとう勢せいひ強大きやうだいにして、官軍くわんぐん戦利せんりを失うしひわ

づか七騎しちきに打うたされ、敗軍くわいぐんの中なかにも義家よしかの射術しゃじゆつ神しん

のごとく、白刃はくじんを冒をかして重圍じゆうゐを破やぶる。是こゝに依よりて各おの

難なんをまぬがるゝことを得えたり。九ヶ年くわんねん苦戦くせんのうち、

終つひに貞任さだとうを討うち、大軍たいぐんを亡ほろぼす。都みやこに

たずさへ、埋うづめて堂どうを建たつ。六条防門ろくじやうぼうもん西洞院さいどうゐん耳輪堂みまわらだう是也なり。

戦死亡せんじつりやう靈れいの為ため千僧せんそうを供養くやうし、仏像ぶつざうを安置あんちし、伊豫守いよしゆ

正四位下せいしやうゐに昇のぼる。勇ゆうのみか、風月ふうげつの才さいにも富とむ。ある

時難波ときなんばの商人あきひとものうり物売ものうりてかへるとき

いあしもて帰る難波津のなみト

いひければ、頼義言下に

いみだれ藻はすまひ草にぞ似たりける

永保二年十一月三日逝去。八十八才。

清原武則

② 賤の女がしづはた布のぬききうつ

うの毛のぬのゝほどのせばさよ

武則は出羽国山北俘囚の城主にて清原真人光頼

の弟也。永承五年、將軍頼義より加勢のことを申込

しに、早速領掌して一族良等を集へ、一万余人を卒

し栗原郡宮岡に至り、將軍に謁す。此地、坂

上田村丸の勢を集し吉例の地なれば也。爰にて

軍術を談ずる折から白鳩飛來りて、旗竿の上に羽

を休む。是弓矢神の示現なりと諸軍勇進んで貞任

の伯父良照入道の籠りし小松の柵をおびやかさん

と、民家に火をかけし所、其火城中に吹こみ、敵兵

周章さわぐ折から、武州兵を發して攻寄しに、忽

落城におよぶ。なほ追々軍功ありて、平均ののち

都に召れて、鎮守府將軍從五位下を給はり、貞任

が所領六郡の押領使となさる。譜代の臣下まで忠功

の浅深に寄て歡賞を給はりけり。

③ 日もくれぬ人も帰りぬ山里は

峯の嵐の音ばかりして

源頼実は頼光の孫、頼國の子也。頼実の知

音に説法をよくする僧の有けるが、壇越も多ければ

財に富たり。ある日その坊に旅僧一人來り。宿を

乞ければ、ゆるして泊らするに、夜に入り門の戸荒

やかに叩ものあり。「何ごとそ」と問に「使の庁の

使也。是にやどれる旅僧は世にしられたる盗人也。

逃さば同類たるべし。夫を捕ん為、檢非違使の判

官むかひたり。早明よ」といふ。御戸を明ヶける

に、五、六人刀拔つれ、主の僧を押付、「汝はた

らかば刺殺ん。坊中の物のこらず渡すべし」と心

の俛にさがしきて、馬七疋におほせて、僧をも縛り

のせて急粟田の山に連行、「もし此ことさたせば、

三日がうちに殺べし」と山中に僧を捨て行たり。扱

頼実は此夜月にうかれてあゆみしが、かの僧の泣居

し所へ來あはせ、此由を聞、直に盗人の後を追か

け三人を切伏、残りに手を負せ、難なく馬を引戻し、

僧を助けかへりし日人也。此歌『後拾遺集』雜に入る。

右衛門尉 源 頼実

平教盛

④今日までもあればあるかな世の中に

夢のうちにゆめを見るかな

門脇中納言教盛は清盛入道の弟にて、三位通盛

能登守教経等の父なり。武に猛き人にて、平家の一

門都を落て後も、備中国下道郡の野に五百余騎

にて備へし所、四国、九州の軍勢源氏に心を通じ、

二千余騎教盛の備を取かこみて攻れれとも、事も

せず。悉おひ払ひ、勇を震て、淡路冠者、

掃部冠者といふ二人のつはものを打取り、子息通盛、

教経と一所になりて、再び主上を都へ還幸の事

を計るに、その憲証として正二位大納言を送り給ひ

ければ、教盛西海の波路行涯さだめがたき夢の世に

此昇進も又夢なりと此歌を詠じて位階を御辞退申

上て世をはかなみ、亞相にはなり給はず。恩義に

一命を捨て後の世に名をのこしぬ。

平知盛

⑤住馴し都のかたはよそながら

袖に波こそ磯の松風

新中納言知盛は入道清盛の三男にて、一門第一の

武勇の人なり。元暦元年十月、屋島にありて四方

を詠めしに、蒼海漫々として眠をおどろかし、夜

半の月明々として、水にうつる影、鎧の袖をてらし、

浦吹風に磯こそ波高く、行通ふ舟もまれに月日程ふ

るにつけても、都こひしくおぼして此歌はよめり。

斯て屋島の船軍いまだ戦なかなるに、阿波民

部大輔成良心変ぜしかば、味方利運なきをしりて、

人々に生害をすゝめ、舟掃除をせさせ、覚悟の打か

ら二位の尼ぎみ、先帝を抱き奉りて入水ありしかば、

知盛今は心安しとうち笑、門脇教盛と目くばせして

二人とも鎧ぬぎ捨、腹一文字にかき切り、海中へ

まろび入、その勇名を後の世にのこしぬ。

平重衡

⑥住なれし古き都のこひしきは

神も昔におもひしるらめ

本三位中将重衡は太政入道清盛の四男にて、生質

優美にして智勇備り、詩歌管弦に高聞せし人也。

此歌は都落の節、北野の社へ参詣して、今斯九重

重を捨て遠州波路に赴く。此かなしみを神も昔に

思ひしりましまさんとなげきてよみし也。後重衡は

運拙く、捕れとなりて鎌倉に下りしかども、源二

位ことのほかいたはり、心を慰めんため美女をあ

また附おかる。その中に容儀勝れし手越の千寿を  
昼夜側におかれけれども、糸竹朗詠のほか更に心を  
うごかさず。旦夕に死を待て仏名を唱へ、後南都へ  
わたされ、最期のみぎり、西の方へ時鳥の啼ゆき  
ければ、

「おもふことかたり合せん時鳥

実まじにうれしくも西へゆくかな

後藤守長

⑦五月さつき聞きくらはし山やまの時鳥

すがたを人に見するものかは

後藤兵衛守長は平家の良等にて、中将重衡心づ  
けて召仕ひ給ふ。ある時、重衡卯花に時鳥をかき  
たる扇あふぎの地紙ぢがみを取り出し、「是を張てまゐらせよ」と  
あれば、守長承うけたまはりていそぎはりける。分廻しを  
あしく充て時鳥の画ゑの中を切りけること深く、尾と  
はねのみあらはに見えければ、守長誤あやまちしぬと思へ  
ども取かへべき地紙ぢがみなければ、詮せんかたなく是を仕立  
てまゐらすに、重衡しげひらしらずして参内さんだいし、御前ごぜんにて  
其あふぎを遣つかひければ、帝みかど覧らんありて、「無念にも  
名鳥なとりに疵きずをつけけるものかな」と笑わらはせ給へば、重  
衡しげひらおそれ退出たいしゅつして守長を召めしよせ、ことのほか折

檻かんありければ、恐れおのゝき、とかくして此歌を進ま  
らするに、後重衡此よしを奏そうするに、ことのほか御  
感かんありければ、後藤ごとうが誉ほまれとはなりぬ。誤あやまちちの功  
名めいとは是なるべし。

武蔵坊むさしぼう弁慶べんけい

⑧浦うらづたへ波なみのよなくきつれども

今いまぞはじめてよきめをぞ見る

弁慶べんけいは熊野くまのの别当べつたう堪玄たんげんの子にして、胎内たいない十八ヶ  
月しゆつねに出生しゆつせうす。義経よしかげにしたがひて無二むにの忠臣ちゆうしんなり。  
学文がくもんに秀ひいで、能書のうじよの聞きこあり。判官はんくわんかま倉くらどのと  
不和ふわになり北国ほくごくへ落給おちふ時、弁慶べんけい御使ごつかひにて北きたの方、  
卿けうの君きみの方かたへ参まゐりしに、卿けうの君きみかこちて、  
「つらからばわれも心のかはれかし

などうき人のこひしかるらん

此歌このうたを聞きて弁慶べんけいあはれを催もよほし、見捨みすてがたく女性によせう  
をも山伏やまぶしの姿すがたにやつし、種々しゆくくいたはりかしづき、  
遠とほき旅路たびちにともなひしは、武ぶに猛まうきに引ひかへて、  
情なさけある心こころといふべし。斯かくて主従しゆじゆ十余人じよく、諸所しよじよの苦  
難なをのがれ、漸やがく越後えちごの岩戸いわとの崎さきといふ所ところにつきて、  
海人あまのかちめといふもの取とりを見て、北きたの方、  
「よもの海波うなみなみのよなくきつれども



今ぞまことのうきめをぞ見る  
此歌心よからずと弁慶返しに、浦づたへの歌はよ  
みしとなん。

武蔵前司義氏

⑨ 霰ふる雲の通路風さえて

乙女のかざし玉ぞみだるゝ

義氏は清和源氏式部大輔義国より四代足利上総  
介義兼の二男にて、智勇をかねたる大将なり。父義  
兼は頼朝公と連壻にて、北条一家ともしたしみ深し。  
足利一類は、和田合戦にも北条の味方にして、由井  
が浜の軍に朝比奈三郎とわたり合力戦せしかども、  
義秀は死傑の者と悟りてその場を避、諸所の戦功入  
のしるところ也。又承久の乱には東海の先として  
宇治をわたして軍利あり。且頼家、実朝ほろび給ひ  
し後は、足利のみは八幡どの、後胤なりと北条家に  
も尊教することひとかたならず。北条は源家の被  
官なれども、足利は源家の正統なりと重んずる者  
多し。ゆゑに義氏より四代の後、尊氏天下の権をと  
り、正成、義貞の上に立ことこの謂なりとかや。

源 光行

⑩ 武隈は松の緑もうづもれ

雪をみれとや人にかたらん

大監物光行は清和源氏豊前守光季の子也。父は  
清盛に仕へければ平家滅亡の後、鎌倉どのこれを誅  
せんと宣ひしに、一子光行は京の事に馴、和歌を  
よくするを以て頼朝召仕ひ給ふ。去に依て光行父が  
一命を乞請て助たり。斯て其後、光行承久に後鳥  
羽院にめされて、関東の大名へ院宣の当名、又は  
副書などかきしこと顕れ、罪科のがれがたく、鎌  
倉へ召下され清久五郎家盛に預らるゝ。光行が嫡  
子式部丞親行は鎌倉に仕へて、父が罪をかなしみ、  
慰めて、

ゝきてとふもけふばかりなる旅ごろも

あすは都にたちかへりなん

光行かへし

ゝたび衣なれきてをしきなごりには

かへらぬ袖もうらみをぞしる

此歌にも後悔の色見へて、あはれふかし。

源 親行

⑪ いたづらに行てはかへる年月の

つもるうき身にもものぞかなしき

式部丞親行は父が科いかざなりゆく事と案じ居たりしが、北条義時殊の外怒りつよく、光行は故右大將家の高恩を蒙りながら、此度の乱行に與せしこと頗曲者なれば、はやく首を刎らるべしと下知ありければ、既にその儀に決す。然るに親行、北条の館に参りて、某多年奉公の勞に宥ぜられ、父が死罪を思免下さるべく、もし御聞捨なきに於ては、某が一命を先へ召るべき旨愁訴に及び、其座をたちさらず。北条父子彼が孝心を感じ許容したまひ、刑戮をとどめ赦免状を給はる。是を聞くもの持べきものは子なるぞと誉さるものはなかりけり。光行、父光季の命を助しにより、その子親行又我身を助る。孝の徳是にてしるべし。親行歌道に名あり。のち鎌倉営中にて源氏物語を講ず。

⑫吹払ふ嵐にすみて山の端の

松より高くいづる月かけ

北条貞時

北条相模守貞時は道閑入道時宗の息男にて、十四歳より家督をつぎ、文永十年政事の加判となり、國々へ忍びて使ひを遣はし、守護地頭の善悪を聞

悉く民間の愁苦を問ふ。夫より年々百余人の忍びを遣はすところ、その使行先にて悪事ありしを、貞時しらざりしが、羽黒の山伏来りて直訴せしより、使の悪事を糾明して罪に行はるゝゆゑ、世の中治りて善政を賞す。又、筑紫、長門等に探題を置き、西国中国のこゝをつかさどり、かつ又異族のおさへとす。摂州兵庫の寺に平相国清盛の石塔は高きにして十三重なり。銘に弘安九年二月とあり。彼塔は此貞時の建る所にして、清盛薨去の際にたてしにあらざり。貞時は執権織を廿八年つとめて、応長元年四十一にて卒す。

⑬人しれずいっしかおつる涙川

千葉新介氏胤

あふせにかへる名をながすとも

千葉新介氏胤は千葉常胤より九代の孫にて代々下総の国を領し、武勇ある謀将なり。延元元年、足利尊氏、同直義大軍を以て上洛す。新田義貞、同義助、楠正成、名和長年等、拒み戦ふといへども、大敵に敗軍して都も内裏も炎上に及ぶ。ぜひなく後醍醐天皇叡山に臨幸あり。千葉新介供奉となりて登上す。尊氏、細川定禅を三井寺に遣し叡山を責

んとす。官軍新田、北畠、宇都宮等、律師定禪を討んと三井寺へ押寄る。千葉新介は千余騎にて正月十六日宵より志賀の里に陣どり、翌朝諸軍に先立、一二の木戸を攻破り、多勢の中へ切て入り、兜首二打取り、半時ばかり戦ひて、一足も引ず討死して世に勇名をあらはしぬ。

足利義詮公

④いはいし水たえぬ流れをくみてしる

ふかき恵ぞ代々にかはらぬ

足利義詮公は尊氏の嫡男にて二代將軍也。武威を四海にしめ給ひ、また和歌に名高く、貞治三年卯月住吉に参詣あり。道すがら江口の里に舟をとどめ、西行のふることを思ひ出で、

いをしみしもをしまぬ人もとどまらぬ

かりのやどりにひとよねましを

長柄にいたり、古き橋の跡杭など見て、

いくちはてしなながらの橋のながらへて

けふにあひぬる身ぞふりにける

天王寺に詣て亀井の水をながめて、

いよろづ代をかめ井の水に結びおきて

ゆくす多ながくわれもたのまむ

住吉にいたり四社の神殿を拜して、  
いよもの海ふかきちかひやひのものとの

民もゆたかに住よしのかみ  
和歌の道を守り給ふ神徳を感じて、  
い神代より伝へつたふる敷島の

みちに心もうとくもあるかな

阿波将監和氏

⑤武士のこれや限りのをりくも

忘れざりにし敷島のみち

細川和氏は細川八郎太郎公頼の子也。延元元年、三井寺合戦の後、尊氏毎度戦ふごとに利を失ひ、都にも足をとどめがたく播路に落けるを、正成、義貞追討にしければ、尊氏、直義兄弟兵庫へ退き防ぎけるに、九州勢足利へ加勢するといへども、悉く敗軍して今は詮方なく、足利兄弟兵庫の御堂におゐて自害せん覚悟なりしを、細川和氏しきりに是を諫めて、辛うじて舟に取乗り、筑紫のかたに赴く。尊氏播路瀉を見て、

いいまむかふかたは明石の浦ながら

まだはれやらぬわがおもひかな

是を聞て、和氏此歌を詠じて心をなぐさめ、九州

に落延び、再び大軍にて上り、先敗の恥辱をすゝぎ、足利の代となせしは此和氏が功なりけり。

左馬頭基氏

⑩鶴が岡木高き松を吹風の

雲井にひびく万代の声

左馬頭基氏は尊氏將軍の三男にして、貞和五年十月、兄義詮公は京都の政事を執行ひ、弟基氏は鎌倉に下りて関東のまつりごとをつかさどる。畠山入道誓と謀て新田の一族を探求、義興を武州にて討、鎌倉を治む。尊氏、直義、陸、かりしころ、関八州を直義に与へ、基氏を猶子として鎌倉におき、京都静ならざる時は、関東より兵をのぼせ天下をしづむべきことに定め置し也。其後尊氏、直義逝去してより、義詮、基氏の心をうたがひ打とけず。基氏此ことを愁ひ、病ひに臥ても医薬を用ひず。はやく死して兄の心を安からしめんと死すことを願へり。貞治六年関東の宮方起る故、基氏川越を攻んと欲すれども、病あるゆゑ一子金王丸を名代として発向せしめ、その跡にて卒去す。歳二十八。瑞泉寺殿と号す。

佐渡判官道誉

⑪さだめなき世をうき鳥のみがくれて

下やすからぬ思ひなりけり

佐々木道誉は義詮將軍を守護して都にありけるに、南方より楠正儀不意に京に攻上り、御所を取圍ければ、義詮公没落し給ふ。此時道誉も都を落けるが、我宿所にさだめて敵の大將入移んと大紋の幕を張り、疊を新しく敷かへ、床に王義之の軸物を掛、一間には沈の枕に緞子の宿直ものを取副ておき、十二間の遠侍には魚鳥を取らべ、三石入の大瓶に酒を湛へ、斯とりそろへ遁世者二人留おきて、「誰にても此宿所に入来らんものに一献進めよ」と巨細に申おきけり。程なく楠正儀入来りしに、遁世者右のわけを申、迎入れれば、正儀是をき、恨ある当敵なれば火をかけ焼すてべきなれど、此式を感じ、庭の木一本も損ぜず、疊をも汚さず、還て、居間に秘蔵の鎧と太刀一振をおき、良等一人止め、礼を厚くして、道誉に返しけり。戦国にも両將の礼を崩さぬを皆感じけるとなん。

北畠准后親房

⑫わきてたが頼心の深き江に

ひける菖蒲ぞ根とはしらなん  
北畠源大納言親房卿は、はじめ伊勢にありて、南朝無二の御味方なり。文武とも衆に越、数度の戰場に勝利を得ぬことなし。南帝の皇子宗良親王遠州より吉野に入給ふを、親房より訪ひ奉り、菖蒲に添て此歌を奉りければ、宗良親王返歌に、  
ゑふかき江もけふぞかひあるあやめ草

きみが心にひくとおもへば

親房卿常陸にありて、軍務に隙なき折からなれど、『神皇正統記』五巻を作り、吉野へ献ず。吉野御一所に行宮殿閑なく、月卿雲客、昇進除目の式目殆絶んとす。親房卿常陸国小田の城に居して、『職原抄』二巻を書き、又吉野へ献ず。これにて百官位職皆掌を指がごとし。末代に至りて帝都の龜鑑とす。両書とも文書一卷引ものなくして著す。その博学これにてしるべし。

高階師冬

〔9〕初秋はまだ長からぬ夜半なれば

明るやをしき星合のそら

高播磨守師冬は鎌倉基氏の執権となり、貞和五年五月軍兵を催し、常陸小田の城を攻る。南朝方

いきほひ強しといへども、師冬方へかへり忠のものありて開城に及びければ、かの国を切なびけ、師冬、上杉憲頭と共に基氏を補佐してかまくらの執権たり。観応元年、基氏と不和になり甲州に立さる。管領は憲頭一人となり、師冬は甲州伴野村栖溪の城において、上杉能憲と戦ふ。信州諏訪の祝部寄手に加り、六百余騎三日三夜息をもつかせず攻ければ、城中勞れ、後話のたよりもなく師冬術計つき果て、最期の一戦はなぐしく敵を脳まし、腹一文字にかき切りて、勇名を世にのこしける。

武田信武

〔20〕梓弓もとのすがたは引かへぬ

入べき山のかくれ家もなし

武田伊豆守信武は新羅三郎の末武田の正統にて、初信氏と云。尊氏將軍へ忠勤の武士なり。延文三年四月廿九日、尊氏薨じ給ふ。御子義詮南方の敵と戦ひ、凱陣して間もなきことゆる不幸をなげき、愁ひにしづみたる折から、信武剃髮して、梓弓の歌を詠じければ、義詮涙にむせび、  
ゑ袖の色かはるときけば旅衣  
たちかへりてもなほぞつゆけき

かく詠じ歎きの中へ勅使下りて、尊氏へ贈左大臣従一位の號を賜りければ、義詮則和歌にて勅答す。

かへるべき道しなれば位山

のぼるにつけてぬるゝそでかな

始終勅使も聞召て、哀をもよほし此よし奏聞ありければ、かぎりなく叡感あられしといふ。

山名氏清

①さてもそのありしばかりを限りとも

しらで別るゝ我ぞはかなき

氏清は山名時氏の子にて、武勇の人也。南朝の討手に命ぜられ、応安元年より十二年河内、紀伊に向て戦勞をつくしければ、八幡どのゝ例に比すと陸奥守に任ぜらる。

明德元年十月、氏清宇治の別荘紅葉盛りなれば、將軍を招請す。日限を定め御成の催しありけるに、氏清の一族満幸偽て謀反をすゝめける故、約を違へて病氣と号し参らず。將軍宇治より空く還御ありて、立腹なめならず、氏清是より反て旗を上、八幡山に陣取、消息の序に妻のかたへ此歌を送りけるに、其返に、

よしさらば死出の中道へだつとも

むつのちまたによりもあはなん

氏清強勇なりといへども、諸所の戦に味方敗軍し、其身も一色が為に討死す。辞世、ひとり得ずはきえぬと思へあづさ弓

引てかへらぬみちしづのつゆ

斯波義将

②春はなほ咲ちる花の中に落る

吉野の滝も波やそふらん

斯波治部大輔義将は、尾張守入道道朝の男也。二条勘ヶ由小路武衛の陣に居す。仍て武衛家と号す。天下三職の一人也。永徳二年従四位下左兵衛督に任ず。

文和二年七月越中に桃井直和、將軍の命に随はざれば、義将彼国に走向つて数度戦ひてこれを誅戮し、是より越中に陣を張ること九ヶ年、応永六年大内義弘野心につけ、氏清の二男満氏等蜂起して乱に及ぶ。此とき義将、即日走向つて堺をしづめて軍ををさむ。

三代義満公の治世、永和に菊地を攻、又は鎌倉の満氏叛き、明德に山名一類、応永二年小弐、大友、

千葉謀反、同六年には堺乱、その後飛騨の国に藤  
原に至るまで義将執事となりて、軍馬の勞多し。

源 清氏

⑬音だにも秋にはかはる時雨かな

木の葉ふりそふ冬やきぬらん

相模守清氏は、和氏の長子なり。

文和二年、山名時氏、其子師氏と謀叛して南朝  
方となり、伯耆国を打立、南方と標じ合せ京都へ  
攻上りければ、防ぐ事あたはず、北帝を伴ひ奉り、  
義詮東国へ落けるに、敵追ひ来ること烈しく防か  
ねけるを、清氏力を添へ北帝を脊に負ひ奉りて、  
美濃国垂井に遁れて皇居を造る。

延文四年十月仁木頼章卒して、細川清氏武家執  
権となる。南方竜泉寺の城を攻落し、後畠山道誓  
と中よからず、都を退き一たび阿波国に赴き、  
四国を治む。佐々木道誉とも不和になり、讒臣の為  
義詮公に不興をうけ、一たび南朝方となり、後同姓  
右馬頭頼之が為に討死して果ぬ。

大内介義弘

⑭ひかずのみふるの早田の五月雨に

ほさぬ袖にもとるさなへかな  
大内左京大夫義弘は從四位上に任じ、周防、長  
門、豊前、石見四ヶ国を領し、代々武勇の家なり。

明德二年内野合戦にめざましき功名を顕せしに  
より、その勸賞に和泉、紀伊にも領地を給はり、  
同三年南北朝の御和睦を調へ、皇孫一統のことを  
はかり、五十六年の間の鉾楯をとり結び、南帝を  
嗟峨大覚寺にうつし奉り、三種の神宝を再び京都  
へ歸入し奉る。此賞に豊前国を給はり、従上と  
なる。

和歌をよくして『新拾遺』に入。

応安五年、今川了俊九州探題として下向の時、  
菊地以下の南朝方了俊を討んとせしを、義弘加勢  
して是を救ひ、富極て奢侈となり、天道満るを欠  
の道理なる歟、応永六年何の敗もなきに謀反を企  
て、堺浦合戦に戦死す。

篠川持仲

⑮咲く時は花の数には入らねども

散にはもろき山桜かな

篠川右衛門督持仲は、鎌倉新御堂満隆の子なり。  
応永廿三年、前の執事上杵氏憲入道犬懸禪秀、

管領持氏の不興を蒙りて蟄居してゐたりしが、持氏の仁恵なきを恨み、持氏の舍弟満隆をすゝめ逆意を企て、関州へ早馬を走て味方を集るに、直に十万余の勢集ふ。これ執事の判物にては、急に走付べき法あるがゆゑ也。此大軍にて、持氏の御所を夜中に取囲む。持氏忍びて豆州走湯山へ遁れ、此由京都へ注進しければ、將軍より関東の武士へ御教書を給はりければ、即時に大軍集り、大懸と新御堂を攻けるに防ことあたはず、禪秀親子滅亡に及び、満隆も自害し給ひければ、持仲は此謀反の企てはしり給はねど、残とまらるべきにあらねば、最期の辞世にこの歌をのこし、腹かき切てはて給ひぬ。

〔26〕咲てこそ人も盛りは見るべきに  
足利義勝公

あなうらやまし朝顔のはな

義勝公は義教公の長子にて、母は裏松左府重光公の女なり。義教公赤松満祐が為に御他界ありければ、八歳にて將軍宣下ありてより、山名、細川守護となりて播州白旗の城に押よせ、逆敵赤松を滅し、六条河原に掛させられ、御幼年なれど武術稽古怠り

なく、太刀打兵法、馬術等日毎に行はせ給ふ。其ころ出雲より名馬を献じければ、是に召給ふに、一条兼良公諫を入れて、「名馬彼国より出ること、先例よろしからず」と申、御馬術を止め申せども御聞入なく、嘉吉三年七月廿一日、馬場に賣馬二、三返のらせられる所、此馬俄に踊て駆出しければ、御落馬ありて急所を打給ひけるにや、御脳はなはだしく、此歌を辞世としてのこし給ひ、御とし十歳にて薨じ給ひぬ。天下の人、をしまぬはなかりしといふ。

〔27〕なか／＼に九十折なる道たえて  
伊達大膳大夫

雪に隣りの近き山里

伊達光録卿政宗は山陰中納言九代の孫、弾正少弼宗遠の嫡男にて、文武に秀給ふ将なり。

『南朝紀伝』に、鎌倉満兼の舍弟を陸奥の管領として、篠川の城に下向ありて、篠川の御所と称す。然るに伊達の入道を軽しめたるよしにて、礼式の薄きを心よからず思ひ、下知に応ぜず。是によつて、鎌倉より右衛門佐氏憲大軍を引卒して、陸奥赤館において合戦に及ぶ。伊達勢強して、上枚勢敗軍して



引退く。かさねて鎌倉より大軍加り戦ひに及ぶといへども、九月五日和睦となる。此時政宗、山家雪の題にて此歌を詠じ、敵陣に送りしといふ。また山家の霧の題にも歌あり。

山あひのきりはさながら海に似て

なみかときけば松風のおと

春王丸

28 よろこびの世にあふみとはなりもせで

青野がはらの露ときえまし

安王丸

29 あひ川や袖をひたして行ききも

たる井の露と消やはてなん

春王丸、安王丸は鎌倉の公方持氏の二男、三男

なり。永享十一年御父持氏亡び給ひし後、良等ど

も落しまゐらせ、日光山の奥に忍ばせ置しに、結

城七郎氏朝迎ひ取て結城の城にいれまゐらせけれ

ば、此よし京都へ聞へて大軍を發し攻るといへども、

城の要害はよし、氏朝父子勇を震て防戦しければ、

寄手攻落すことを得ず。三年までは籠城に及けれ

ども、あら手を入るかへく責ければ、終に嘉吉元

年四月十二日落城に及び、春王、安王をも奥州ま

で落さんと計けれども、運拙く生捕れ、道中警固きびしく、古郷かまくらを通りし時、御父持氏公自害し給ひし永安寺を御輿の内より手を合せ拜給ひしを見て、かまくら中のももの泣ぬ者はなかりしとかや。

それより日を経て遠州菊川の宿につきけるに、

此所は元弘年中俊基卿囚れ給ふとき、一首の歌を

宿のはしらにかきおかれる。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじ流れに身をやしづめん

これを見て、承久といひ元弘といひ、あはれを

かさねし所なり、今は我身のうへとなりしと春王

丸筆を染て、

いまでも又なほうきことをきく川の

瀬々のおもひに沈むはかなさ

夫より日数つもりて美濃国青野が原に着し時、京

都將軍の命にて誅すべき由にて檢使萩野三河入道下

りければ、今は詮方なく垂井の金蓮寺へ入奉り、

御生害をすゝめ申せば、二人ともわるびれもせず、

父の最期の御供におくれ爰にて果るも因果不味の

理にて、歎べきにあらざと心しづかに念仏して、

兄弟とも此歌を辞世にのこし、自害して果給ふは

哀れはかなきことども也。春王丸十三才、安王丸十一才、嘉吉元年四月廿六日のことなりけり。

③〇 昔見し垂井の水のかはらぬに

上牧安房守憲実

写れる影のなかはるらん

上牧憲実 はかまくら持氏公の執権たりしが、持氏は京都將軍義量公御早世の後、御跡目をも継せらるべきとの御沙汰もありしかば、御心悅の所、義教公嗣たまひければ、持氏本意を失ひ面目なく思して、京都を攻んと議せられけるを、憲実是を諫ることしきりなれば、持氏怒らせられ憲実を討んと計給ふゆゑ、ぜひなく伊豆の国へ身を退く。持氏益々反逆あるに仍て、京都より討手來つて持氏父子とも亡び給ひ、鎌倉四代九十年の繁昌一時に滅却す。憲実かはりゆく世を觀じ、出家して長棟禪門と号し、行脚となり、みの垂井にて水相觀の心にて此歌はよめり。

又河内の国金剛山の奥に草菴を結び、戸板に書て、

かつらきやよそにぞ見てし峰のくも

たもとにわくる秋の夕ぐれ  
此歌をのこし置て、行方しれず。足利の學校に書

を蔵しは、此人のなせる所也。

③① さらぬだにほさぬ袖師の浦千鳥

大内修理大夫持世

いかにせよとて寐覚とふらむ

大内持世は大内介教幸の子にて、防長豊石四ヶ國を領し、武勇の人なり。正五位にて年月久しく過行、父祖の叙任四位の階にのぼらざることをなげきかこちて、

をりくくに袖こそぬるれたらちねの

かしらにおきししむしばのつゆ

此一首を詠ぜられしに、義教將軍ことのほか御感ありて執奏なし給ひ、從四位の下に叙せられしとかや。詠歌多く、『新統古今集』に載らる。其後嘉吉元年六月廿四日、赤松満祐謀反を企て、義教將軍を弑し奉る。持世も其日御供にてありしかば、彼所にて手いたく戦ひ深手を負けれど、堀をのり越え立退しかども、疵養生届かざるや、七月八日に落命す。

③② 藻塩草かくとはたれかしら露の

細川勝元

消しにつけてぬる、袖かな

細川勝元は武蔵守持之の嫡子にて、智勇兼たる大将也。十六歳の時より管領職をつとめ、政徳正しければ人皆尊敬す。然るに山名入道宗全と確執に及び、合戦数度にして都動乱す。相国寺を預おきし安富民部丞元綱、我身に替りて討死せしを悲しみ、鎧の袖を干もあへず、此歌を追慕に手向、なほ吊合戦して敵あまた打亡すといへども、諸国の軍勢相加り、山名方十一万余人、細川方十六万余人、余ときこえし。

文明五年三月十九日山名宗全病死しければ、勝元方へ日々勢の加ること限りなき程なりしに、五月十一日勝元も重病に侵されて卒去せしかば、頼をかけし軍勢ども思ひの外に機を損じ、盲人の杖に放れしごとし。味方の内にはかなきを観じて、ある人、いづくにか身をもよせまししら雲の

たなびくみねもさだめなければ

33 さき匂ふはな橘も君ならで

誰に御階の梢ならまし

応仁の大乱、山名、細川の大军都に戦ひ、爰

二階堂判官政行

彼所より兵火盛に起り、また山名方の者ども内裏へ切り入り、主上を取奉らんと聞えければ、御所の男女騒動して安穩ならず。鳳輦を室町の御所へ武士ども警固して御幸なりしに、當中にも山名へ心を通じ反逆の者あるよしにて、門の出入を止ければ、御輦を午の刻より亥の刻まで惣門の外にとどめ、公卿、女官等困窮して泣伏、よう／＼花の御所へ皇居を定めし時、御階の橘も折れてありしを、政行此歌を書付けてければ、是を見て木戸三河守もとりあへず、

へちらばなのにはほひも深き情にて

けふをむかしとのちはしのばん

主上これを聞召て、かゝる大乱の中にも優しき武士どもなりと御歡感ありて、物給はりしとかや。

安富九郎元秀

34 夫までの契りなりしを末の松

波越さじともおもひけるかな

安富九郎は、安富民部元綱の弟なり。応仁元年九月十九日、山名宗全味方十一万六千の勢を七手に押分、細川方の籠し所を諸所攻ける折から、相国寺の出城には安富民部丞七百余騎にて籠り、戦数

度に及へとも勝敗更に決せざるに、城中心變の者ありて小屋に火をかけければ、寄手力を得て込入しかば味方過半討死す。

安富九郎も此中にありしが、十六歳の美男にて日比兄弟の約をなし情を通せし者あれば、我討死の跡にて歎んと思ひ是哀におぼへ、袖印の帛を引切、此歌をかき記念に送り、兄民部と共に敵の中へ割て入、討死す。彼契し男も是を見て浅からずかなしみ、我も泉下に追つかんと乱軍に切入り、同じ枕に討死して、同じ塚の苔の下に埋れしこそあはれなることともなれ。

伊達成宗

35 都出る名残は誰としらねども

ひかるゝとのみ思ふ袖かな

伊達兵部少輔成宗は、曾祖父父教入道より二代上洛中絶せしをこゝろならず思ひ、寛正三年の秋陸奥より上洛す。

此ころは関東には古河方、上杉がたとて両方に分れ、合戦止ときなく、また五畿内には畠山政長、同義就兄弟鉾をあらそひて道中さらにおだやかならず。かゝる騒しき戦国の中を恐れず、公方家へ銀

三万匹を献上して御目見えを申上る。義政公浅からず思召、鎧、太刀、その外種々を賜り、大膳大夫に任ぜられ、下向に及び、名ごりををしみこの歌を詠ぜしかは、忽ち内裏にも聞え、遠国のものゝふなれども優しき心やと、ことの外御感ありしとかや。斯る茨の如く乱れし世の道中を、陸奥より都へたやすく行通ふこと、その智勇押はかりてしるべし。

畠山義就

36 うかりける都に何の情ありて  
忘れぬ夢の残るおもかげ

畠山伊予守義就は、持国入道徳本の子なり。徳本始め子なきがゆゑ、舎弟持富の子を養子として尾張守政長と号し、家督たりしが、其後徳本妾腹にこの義就うまれしかば愛におぼれ、家督を又義就に継せんと政長を憎むこと甚し。是よりこと起りて政長、義就兄弟数年弓矢に及び、争ひ止ときなし。義就、將軍家の首尾あしく、河内の若江へ赴きしとき、螺が峠にかゝり都をかへり見て此うたはよめり。

此人將軍の御勘気を三度蒙りて、三度免許ありし人なり。応仁乱に山名宗全がた一番の味方にして、

洛中の大合戦に政長の勢を切なびけ、七百騎を打取り、敵味方の耳目をおどろかせし人なり。

〔37〕たよりのなき外山に住て下枝をも  
大内左京大夫政弘

をることかたき峰の椎柴  
大内左京大夫政弘は贈三位教弘の子にして、四ヶ  
国の守護なり。応仁の乱にも名譽をあらはし、其名  
國に鳴れども、いまだ正五位下にて四位の叙階を  
望れけれども、小折紙むなしく年月を歴けるほど  
に、祖父持世のふることを思ひ、ある時かこちて此  
歌を詠ければ、かたじけなくも勅聞に達し、則四  
位下を勅許あり、なほ又長享元年十二月從上に昇  
る。

古への兵庫頭頼政は、しみを拾ひてとよみて三  
位に叙せられ、政弘は折ることかたきとよみて四位  
に昇る。武勇といひ歌道といひ、頼政の再来にやと  
都鄙かたりつぎて、皆感称せしとかや。

足利義植公

〔38〕日をそへて袖の湊もせきあへず  
身を知るあめのうらのみだれに

義植公は義視卿の御子にて、義政公の御猶子とな  
り、義尚公の後將軍となり、畠山義豊下知に応ぜ  
ざるを御誅伐の為、河内へ下向ありて、正覺寺に在  
陣の所、御旗下の將細川武藏守政元俄に敵義豊と  
一味して、將軍を討奉らんと不意に御陣へおし寄せ  
れば、義植公軍利を失ひ政元の為に敵しく押籠ら  
れしに、助るものありて一たまづ落のび、西国へ下  
向の折から、厳島有の浦にて、  
ゝわがたのむ神のめぐみのありの浦  
ありしむかしにかへせしらなみ  
また周防の国都浜にて、  
ゝはまの名の都わすれな夕ぐれに  
たつうら浪もなくねそふらん  
大内義興を御たのみありて、細川政元を退治せら  
れ、都にましませども、御心の儘ならず、阿波の御  
所に移て此歌を詠ず。

多々良義興

〔39〕うきふしもかきつけおかば人や見ん

かゝるためしも昔ありきと

大内義興は父祖の跡を継、四ヶ国を領し、猶備  
後、安芸、石見等に武威を震ひ、諸国を敵となして

十四年が間、策をめぐらし、都へ責上り守護して、  
義植公を再び天下の武將にそなへ、賢徳異国まで  
も聞え、歌道にも名ありてよみ歌あまたの中に、永  
正八年の冬、都にありて佳境に目を悦しめ、中  
にも比叡山のみねに雪をかさねらは、あづまの富士  
山にもまぎれず眺望かぎりなくおぼえて、  
ゝかくばかり遠くあづまのふじのねを

今ぞみやこのゆきのあけぼの

此歌堂上にきこえて、かたじけなくも和答の詠  
を下され、かつ又天聰に達し御製をたまはる。

ゝゆきに見る山は富士のねことのはの

よゝにその名も雲のうへまで

細川入道常桓

40なしといひまたありといふことの葉や  
法のまことの心なるらん

細川高国入道常桓は義晴將軍の管領なれど、同  
姓春元と戦ひ軍利を失ひ、播州の浦上掃部介をか  
たらひ、再び摂州に責上りけれども、味方の赤松  
政則敵方へ心を通じうら切しければ、常桓悉打  
負、終に大物の広徳寺にて切腹す。最期に料紙を  
乞ひ、義晴公へ、

ゝこの海の波より高きうき名のみ

よゝにたえせずたちぬべきかな

伊勢の国司へ、

ゝ忽にうつす石を作りし海山を

のちのよまでも目かれずぞ見ん

姉のもとへ、

ゝ世の中に迷ふてふことなきものを

まよひといへることの葉はなに

ゝなしといひの歌は辞世にのこせし也。常桓の

臣島村弾正貴則も此時入水して果る。此靈世にいふ

島村蟹となる。

三木牛之助

41人はたゞさし出ぬこそはよかりけれ

軍にだにも魁をせば

三木牛之助は、三木播津守の弟也。畠山高政に

仕へて、大勇猛の者なり。河内国落合上島の合戦に、

一番鎧を入、鎧を通せし太刀疵十三ヶ所あれども、

少も屈せず。或は突伏、或は組討にして目をおど

ろかし、敵将木沢左京長政を打取る。此賞として

八尾の郷七百貫、太刀、鎧に感状を申受し強の者

なり。常に鍬形の兜に書つけて、

運在天見敵無退

此歌をも書そへ、数度功名を顕す。

天文十六年七月、三好宗三とたゝかひ、舍利寺の軍に敵あまた打て討死せり。

後に此歌の事を秀吉公に物語するものありしに、秀吉公聞給ひ、「歌の趣意よろしからず。我ならば、人はたゞさし出たるこそよかりけれ

いくさの時もさきがけをして  
とよむべきものを」と云れけるとなん。

#### 42 秋風の至りいたらぬ山蔭に

太田隆道

のこるもみちも散ずやはある

太田隠岐守隆道は、大内義隆の臣にて勇猛の人也。

天文二十年の春、陶尾張守隆房隠居と号し、富田

に引籠けるを、是全く叛逆の色と悟り、冷泉隆

豊、天野藤内等と共に大将義隆のまへに出て、逆

徒等追伐のため、富田へ夜討をかけ、陶を討取ん

策を申すといへども、義隆聞愚にして承引し給は

ねば、齒がみをなし、大内家の運命傾きしとき也

と涙ながらに引退き、其後、山口没落に千悔して

足すりすれどもその詮なく、義隆とゝもに十三騎に

なるまで付そひ、大将生害のあひだ修羅のあれたるごとく戦ひ防ぎ、敵を討とること数しれず。矢だねつき、太刀折ければ、「今は是まで也」と此歌を辞世として自害して、誉を末代にのこしぬ。大内主従滅亡は、天文二十年九月朔日のことなり。

右田右京亮隆次

#### 43 末の露本の雫にしるやいかに

終におくれぬ世の習ひとは

右田右京亮多々羅隆次は、義隆の一族也。義隆陶

がために山口を落運かたぶきて、長州大寧寺まで落

給ふ。道に度々踏とゞまりて敵を防ぎ、義隆最期の

辞世に、

「討人もうたるゝ人ももるとともに

如露亦如電応作如是観

右田もともに此うたを辞世にのこし、大将の自害

の後も、障子藪など焼草を取かさね、死骸に火を

掛、よせくる敵を矢だねのかぎり射たほし、朋友天

野藤内、黒川隆像、太田隆道、岡部隆影、冷泉隆

豊等とともに切先をそろへ切て出、敵をうつ事かぎ

りもなく、右の勇士等と一同仏間に列座し、腹かき

切り、腸を掴みいだし、死をいさぎよくして名を

後代にのこしぬ。

44 白露の消ゆくあきの名残り

岡部右衛門太夫隆景

しばしはのこるすゑのまつ風

岡部隆景は、大内義隆の臣下にて、陶尾張守が逆意に仍て義隆とともに山口を落のび、主従十三人長門の瀬戸崎へ船をよせ、深川の称名の市を通りけるに、三浦将監尾和兵庫允しきりに追かけ、義隆を討んとす。岡部隆景大きに怒り、「普代相伝の主君に向ひ弓ひく奴原人面獸心敵には不足なれど、冥土の道づれ供せよ」といふ儘に、大太刀拔て切ちらせば、此勢ひに恐れ、敵引いろに見えければ、引かへして、義隆におひつき、又追くれば取てかへし、火の出るまで戦ひてもりかへすこと六、七度身には蓑毛のごとく矢をおひ、大寧寺にてもきびしくはたらき主従居ならび、最期のいとまごひし、此歌をかきのこして、腹かき切り義名を末世に伝へけり。

45 風をあらみ跡なき露の草のはら

民部丞右信

散のこる花も幾ほどの世ぞ

八幡の祢宜民部丞右信は、義隆に随て名高き勇者なり。和歌もよくす。去年義隆、竜福寺において和歌の会を催せし時、民部丞も同席なり。然るに、そのざに見なれぬ老僧一人ありて、物がたりなどせしが、連衆は寺の僧と思ひ、寺のものは召つれられたる人とおもひ、程すぎ満座沈して、静なる折から、かの僧樗といふ題を探りて一首よみ、民部丞にわたす。右信則詠草をとりよみて見るに、  
ゝしるやいかにすゑの山風吹おちて  
もろく樗のちりはてんとは

此歌を再吟せんとせし時、かの僧はかき消ごとく失けり。民部丞おもふに、是陶隆房反逆によりて大内家の衰へを告し也と歎しが、天の命ずる所と心を必死に決し、つひに大寧寺にて勇をあらはし、戦死す。

46 ありといひなしといはんも花もみぢ

平賀新四郎隆保

只かりそめの言の葉のいろ

平賀新四郎隆保は、芸衆頭崎の城主也。此城陶尾張守が附城なれば毛利家の軍勢義隆の甲合戦のため押よする。平賀無勢なるがゆる、同国土山の城



へ一ツになり、合戦しば／＼なるに、毛利勢田寄を  
つけ、城楼をあげて手いたく攻けるゆゑ、城将大  
森和泉守平賀新四郎兩人諸卒の命に替て切腹せん  
ことをいひ送ければ、約諾極りて毛利けより檢し  
を遣す。平賀に直り介錯を止おきて、西に向ひ  
種々経文を唱、はら十文じにかき破り、臍腑をつ  
かみ出し、寸々に切て捨けれども、少もよはる色な  
し。はら切て死ざるものはなきに、いかなればか、  
るさまやと硯をとりよせ、さら／＼と此歌を書  
猶又平賀隆保廿三歳、諸士の命に代て、自裁のち  
永二に於て詠焉をたると筆太に認め、介錯人  
に言つけてくびを打す。まん人その勇を誉ざるもの  
なし。

陶尾張入道全 薑

〔47〕何を惜みなにを恨んもとよりも

このありさまの定まれる身に

陶尾張守隆房は、大内家の臣下なれど、同輩相  
良遠江守と不和になり、確執よりことおこり、義  
隆相良の詞のみを用ひ給ふゆゑ、無念に思ふ折か  
ら、讒者の中言を信じ、主家を亡せしかども、心  
ならず。剃髮して全薑と号し、大友家より養子して、

大内の名跡は立つといへども、威勢に任せて我意に  
つもの。毛利元就これを憎み、陶と合戦度々に及  
び、勝敗なき所全薑三万の勢を卒し、嚴島へ渡り  
かしこを攻しに、弘治元年九月晦日大風雨の夜、毛  
利、吉川、小早川の勢を合せ、闇夜に海をわたし、  
不意を打しかば、陶大敗軍におよび、舟のらんと  
すれども、船は皆奪はれ詮方なく、青海苔山へ入り、  
近臣どもと水盃をして笑を含み、此辞世をよみ、  
若楓といふ名刀にて切腹して果る。因果業報逆罪  
の然らしむる所といふ。

山崎勘解由隆方

〔48〕有と聞なきと思ふも迷ひなり

まよひなければ悟りさへなき

山崎勘解由隆方は、陶方の大将にて軍敗してよ  
り、入道と生死をともしせんと青海苔山まで落たり  
しが、渡るべきにも舟はなし、水練の名人なれば、  
全薑を材木にのせおよぎ渡り、落のびんといふに、  
入道聞てあまたの味方を打せ、われ今にけ帰りしと  
聞えては我ために死たる者の一族へ面を向べきに  
あらずと承引せねば、さらばともに自殺せんと最期  
の盃をなし、舞たはぶれて後、此辞世をよむ。同

朋友垣並佐渡守房精も筆をとりて、  
莫論勝敗迹人我暫時情  
一物不生地山寒海水清

此詩を吟じて、いざ山崎氏同道せんと兩人とも  
に手に手をとり、互に太刀を胸もとへ押あて、エ  
と声かけ刺違へて死す。勇強を人誉けるとなん。

伊香賀民部太輔  
朽ぬる時を君に見んとは

伊香賀民部大輔隆正は、陶尾張守のめのとにて、  
稀代の忠臣也。最期の場合まで側を放れず、青のり山  
まで来り。陶入道石上の苔を払ひて座し、「最期の  
盃 せん水はなきや」といひければ、民部葉広柏  
の落たるを拾ひ、松の葉にて二、三まいとぢかさね、  
谷川の水を汲て莞爾と笑ひ、後漢の道丙は水を酌て  
酒となせば、人酔ことを得たりといふ。これは夫に  
引かへて浮世の酔を覚す。功德水即心即仏ならんと  
たはぶれ、此辞世を詠む。かくて、全薑切腹せし  
かば、介錯して入道の首を小袖につゝみ、谷川の  
淵蔭に隠し、上に岩を覆ひ、心静に二、三丁脇の浜  
辺に出、腹かき切り、手づから首を切おとして死す。

毛利広右四人の首美檢の後、廿日市洞雲寺に納、  
石碑を立て、孝養し給ふといへり。

渡辺可性

命一ツに二ツまきして

渡辺可性も陶尾張守の手にありて、竜が馬場の山  
に落のびかくれみたりしが、毛利勢声々に「元就公  
の仰なり。大将陶入道殿を討しうへは、ほかの勢  
に恨なし。弓の弦をはづし候はゞ一命は助くべし。  
降参候へ」と高声に言ければ、この可性も出て、  
擒となりて引れきたるに、元就卿見給ひて、此も  
のは以前山口へ下りしをり、度々出て狂歌など達者  
によみし者なり。助おきたりとも何の仇をなすべ  
きものにあらざと、召出しいうに、「可性日ごろ好  
む歌一首よむべし。よまば助ん」とありければ、  
言下に是をよむ。さまでの秀逸にはあらねど、よく  
いたしたりと則 命を助られたり。是風流の徳な  
れば、英雄にはあらねど書くはへぬ。

宗阿弥  
名ををしむ人といふとも身を惜む

をしきにかへて名をば惜まし

宗阿弥は陶尾張守の同朋なり。巖島にかくれ

しが、生捕れて引出されたり。毛利元就卿見給ひて

「この宗阿弥は大力の剛の者なり。されども、斯や

みくくと生捕られしことよ。後の禍なるべし。早

く誅せよ」と宣ひけるが「さるにても、汝年来勇

を顕し、今武名の朽なんこともいとはず。自害を

もせず、縲維にあふことよ。しからば命のをしき

には恥も思はずといふ心を歌によめ。汝も達者に

よみしものなり」と宣へば、宗阿弥畏りて、此

歌をよむ。可性が歌にはまさりたりと是も一命を助

け放ち給ふ。此二人勇はあらねど、元就卿の仁心と

人の心を和らぐる歌の徳を感賞して、爰にしろし

ぬ。

武田左馬介信繁

⑤ 数ならぬ心のとがになしはてし

しらせてこそは身をもうらみめ

武田左馬介信繁は、大膳大夫信玄の舍弟也。兵学

に秀、軍立功者なるがゆへ、信玄片腕のごとく

思ひ、大事の場所へは此人を備させしといふ。信

繁子息へ遺書の中に、戦場において聊未練すべ

からず。生んとすれば死す。必死んとすれば則

生る。忠節の臣を忘べからず。善悪同うする時

は、忠臣倦む。褒美は大細によらず、則感すべき

也。功を賞すべきに時を踰ず、深く思ひ立義あり

とも余義なき。異見についてはその意に任すべし。

無行義の人に近付べからず。其人をしらば其友を

見よ。人は賢に馴よ。賤にふるゝことなかれ。

花中の鶯舌は、花ならずして香ばし。是等のこと

数ヶ条あり。永禄四年九月十日川中島合戦に左馬介

は左備なりしが、籓本手詰の勝負ありて、甲州方

軍難義に及ぶ。此時山本勘介初鹿野源五郎等討死

す。此日信繁も討死して、勇名を世に残せり。

⑥ さそふとも何か恨ん時きては

嵐のふかの花もこそちれ

多々良義長は大夫入道義鑑の三男なれども、大内

義隆ほろびてのち、陶尾張守全董がはからひにて、

大内の養子として家督たりしが、政事のごとは全董

の思ひの儘なれば、義長は席上に座すのみ也。弘

治元年いつく島において、陶入道亡びてのちは、国

中の者どもおもひくゝに確執の臣おほく、義長の

多々羅義長

下知にしたがふものすくなく、山口の築山御所衰へたる折から、毛利勢大軍にて押寄せければ、一トさへもせず没落におよび、長府の長福院に立退、家来ども一先豊前へ落、大友家と合体して恥辱をすゝがんといへども、古郷へは錦をかざるべきに、養家を失ひ、名を汚して、人に面を向べきやうなしと義長覺悟して、此辞世をかきのこし腹十文字にかき切て死す。

三好宗三

54 川舟をとめて江口の明暮に

問んともせぬ人をまつかな

三好新五郎入道宗三は、長輝入道希雲の五男にて、長慶とは従弟なれども、中不和にして鉢楯に及び、摂州榎波、中島両城に籠る。天文十八年正月、長慶これを攻んと大軍にて押寄けるに、三好宗三人數をおし出して江口の里に陣をとる。長慶の軍勢江口と根城の道を取切、兵糧を断ば攻ずとも滅ぶべしと其道をふさぐ。宗三飛脚を走て、江州の六角家へ加勢をたのむに、近日むかふべしとあれば、是を待て江口の陣中にて此歌をよむ。斯て江州六角義賢一人にて出馬のよしを、長慶方きつけ、さら

ば加勢の来らぬさきに打取れと、惣軍川を渡し、急に攻たてければ、宗三が勢終に敗軍して、大崩れとなり、宗三入道河内勢の大軍の中に討死す。

光源院義輝公

55 よしや今頼ずとても言の葉の

かはるがすゑに思ひあはせよ

義輝公は、義晴公の長男也。永祿八年五月十九日三好日向守松永弾正等反逆して、大和、河内より京に入り、室町御所を取囲み、鉄砲を打かけ、無二むざんに攻ければ、防者どもおほく打死す。沼田上野介と同朋福阿弥といふもの、敵の合印の竹の葉を腰にさし、外より紛入、御前に参り、「我等二人防ぎ候はん。君には日比愛せられ候。名馬に召して、東川辺に駆入給はゞ、御運を開せ給ふべし」と涙を流して申ければ、「神妙によく申つるぞ。されども汝等が打死したる跡にのこりとゞまるべきや。最期の軍して賊徒等が目を覚させん」と近士等とともに敵あまた打取り折ふし、時鳥の声きこえければ筆を取て、  
〓五月雨はつゆか涙かほとゞぎす  
わが名をあげよ雲のうへまで

是を辞世として主従同じ枕に腹かき切て果給ふ。  
御とし三十七也。

香川兵庫介

56 消ぬとも其名や世々にしらま弓  
引てかへらぬ道芝の露

57 残る名にかへなば何か惜むべき

風に木の葉の軽き命を

香川兵庫介行景は、將軍義晴公の臣なりしが、大内義興、義植公を再任して、義晴公没落に及びしを無念に思ひ、何卒義晴公を世にたてんと若狭の武田元繁の旗下となり、己斐の入道師道と、もに、武田の勢に加り、中国へむかひしが、毛利家の猛勢に及びがたく、武田元繁、熊谷直宗等も討死せり。香川行景、己斐師道兩人は山を隔て二里余脇に備ければ、武田の惣軍敗せし事をしらざりしが、翌朝きこえて、口惜く思ひ、味方の大将打死しければ、皆色を失ふ折から、我一人は甲合戦して、義心を磨かんと兵卒をあつめ、兵糧をつかはせ、香川筆をとりて此歌をよみ、香川兵庫介邁齡三十三、武

田元繁麾下たるにより義のために今月今日敵陣に入て討死すと書たりければ、己斐の入道も是を見て此歌を書そへ、己斐豊後守師道入道行年六十一才同じ意趣に因て懐死すと書のこし、兩人心を合せさしもの毛利勢の大軍も恐れず蒐出て、堅横むじんに突立ければ、敵兵色めき開きて通しけり。香川、己斐と目と目を見あはせ、「今生の契り是までなり。先たちしもの死出三途に待て伴はん」と言かはし、又大軍の中かけ入思ふま、働き、郎等も百五十余人残らず打死せしかば、此兩人も今は世に思ひ無しと乱軍の中に討死す。毛利家にも義心を感じ、此兩人の死骸を円光寺といふ禅院へ送り、孝養ねんごろに取行ひ、士卒の首も土中に埋め是を弔ふ。有田の首塚といふは是なり。

細川澄之

58 梓弓張て心は強けれど

引手すくなき身とぞなりぬる

細川九郎澄之は、武蔵守政元の養子也。其臣香西又六元近権を取、威をふるひ逆心を企、主君政元をひそかに風呂にて殺害し、香西は澄之に世を継せ、我意を以て政事を扱はんとのことなり。三好筑前

守長元これを怒て、家督の事は一家の氏族なきにもあらずと細川右京大夫澄元を跡目にせんと論争起りて、鉾楯に及び香西又六、九郎澄之を同伴して嵐山に城をかまへて籠る。三好長輝、不意に澄之の城郭を攻しかば防がたく、味方多く打死す。澄之「今は是までなり。雑兵の手にかゝらんよりは自害せん」と実父の方へ最期のふみをしたゝめ、奥に此歌を書、鬢の毛を添て是を送り、腹十文字にかき切て死す。廿二才。波々伯部伯耆守介錯してその刀にて自分も自害して死す。

安宅木冬康

59うたふ夜の 暁深く声ふけて

神代ながらの鈴の声かな

摂津守冬康は、三好長慶同実休等の弟也。兄実休は四国の守護細川讃岐守持隆の臣なれども逆心にして持隆生害ありしより、その妾を実休妻とし、悪逆すこぶる甚しければ、天誅逃れざるゆへにや、畠山高政と戦ひ、実休方敗軍せしは、全く逆罪の通れぬ所なりと実休心にくやみて、  
ゝ草からす霜またけさの日にきへて

因果はやがてめぐり来にけり

実休此歌を見せければ、冬康これをなぐさめて、  
ゝ因果とははるか車の輪の外を

めぐるもとほきむさしのゝはら  
斯世乱れて君臣父子の礼もなく、欲心に引れて  
戦ひのみに道のなきをかなしき、  
ゝいにしへをせるせるふみの跡もなし  
さらすはくだる世とはしらすを

松永弾正忠久秀

60世の中に春なかりせばいかでかは

花の影にてきみにあひ見ん

松永弾正は、摂州島上郡の民間より出て、始は貧き者なりしが、神峰山の毘沙門天を信じ参詣怠らず、大晦日の夜そのかへるさに、松明の火きへて難義せしに、化野の煙り立を見て、世の有さまを觀じ、死人を火葬の火を松明にうつし、夫にそなへし供物を取かへりて、翌朝正月元日に祝義をいはひ、是よりだん／＼富貴となれり。松虫を飼ふことを好しが、手をこめて養ひければ、既に三年生たり。彈正思ふに、「虫さへ斯のごとし。まして人には養生あるべきことなり」と申しけり。後、信長と戦ひまけ、自害すべき前に灸をすゑ居たるを見て、

ある人「今死する身に何の養生ぞや」と申ければ、  
彈正答て「我は常に中風の病あれば、死にのぞみ  
起るならば憶したりと人の笑ひ病を防ぎ置、心よ  
く自害せんため也」と灸を仕舞て切腹す。心にとめ  
おくべきことなり。

福井小次郎政家

①生れこし親子の契りいかなれば

おなじ世にだにへだて果らむ

福井小次郎は、父源左衛門と共に中国より撰ば  
れて、備前福岡の城に籠り、隣国の敵を引うけ数  
度戦ひけれども屈する色なく、ある日敵の油断を  
見すまし、父ととも討て出、思ふまゝ働き、引  
上ケ、父は城に入たりと思ひ尋るに、行方見えざれ  
ば驚き、又城外に打て出、寄手の中へ名のり出、  
横立に切てまはりしが、あまり戦ひ勞れ身体自在  
ならねば、家人ども肩にかけ引入しに、手疵二十六  
ヶ所あれば終に活たえたり。跡に鎧櫃に母の方への  
文あり。幼少の時より御別れ参らせ、此儘打死せば  
御歎の程こそ心にかゝり候。しばしこの世に残り  
給ふとも、終にはあふべき所こそ候へば、御心を  
なぐさめさせ玉へとかきて、おくに此歌あり。今年

十九歳なりとかや。

浅井長政

②さゞ波や志賀のうらはにすむ月を

いかゞ見るらん雲の上人

浅井備前守長政は、下野守久政の子にて、和漢  
の学に名高く、武勇のきこえある将なり。

永禄三年の春、十六歳にて北近江五郡の軍勢を引  
率し、六角入道承禎、同右衛門佐義弼の多勢を引う  
け、一戦に打勝、武名を遠近にあらはし、江州一国  
をことごとく切なびけ、手にたつ者なし。

同七年濃州の織田信長の妹婿となり、其比威勢  
近国に鳴動す。越前の朝倉と年来睦しに、織田信  
長盟約を破り、朝倉を討つことを憤り出陣す。此  
歌は軍船を湖上に浮め、有明の月のてらすを見て、  
今武備に隙なき千戈の内にも、月花は心をなぐさ  
むものを、月卿雲客の優美の人には、詠る心は別  
なるやいかゞぞ、とよみし歌也。

朝倉義景

③君が代の時にあひあふ糸桜

いともかしこきけふのことは

朝倉左衛門督義景は越前一国を領して、武威盛んなれば、新公方義昭公彼国へ御動座ありて、当敵三好退治のことを御頼ありしに、朝倉御請に及びしかば、義昭公御悦びの余り義景の母を執奏ありて二位の尼に任ず。

永祿十年の春、一乗谷南陽寺にて公方家花の宴あり、義景此歌を詠ず。其後義景の息男阿君丸死去せし故、義景愁に沈み、軍延引に及びし折から織田信長より密使来り、公方家上洛の義を進め申すにより義昭公越前を御開きあり、濃州岐阜へ赴き給ふ。是より信長將軍再興と号し、諸国を平呑せんとす。義景の女を本願寺へ嫁して朝倉と本願寺唇齒の因を結び、相互に急難を助る約ありし故、信長これを憎み、終に確執に及ぶこととなりけり。

64 これやこのうき世の外の春ならん

花のとぼそのあけぼの空

鈴木飛驒守重幸

鈴木重幸は、始源左衛門といふ。紀州より出て、鈴木三郎重家の子孫也。信長石山本願寺を攻るに仍て、門徒よりたのみ重幸を軍將とす。重幸采配をとるに勝利を得ざることなし。さしもの信長十余

年戦へども石山勢に勝ことを得ざれば、怒て宗旨の根を断んと欲す。重幸猶も策て大敵を碎んと思ひしに、夢中に尊き僧あらはれて、最上川人をくだせばいなぶねの

かへりてしづむものどこそきけ  
此詠心ならず思ふに、又の夜同僧の  
世を治め民をたすくることろこそ

やがてみのりのまことなりけれ  
此歌に悟り心晴て、信長我を憎みけるゆゑ、猶宗旨をにくむ。我死なば心とけて攻ること緩ならんと覚悟をなし、一族鈴木孫市に遺言して謀の書をのこし、出陣の砌此歌をよみ、心の儘戦ひて敵を脳し、其後入水せしとも山籠するとも云て、行方しれず。

65 命より名こそ惜けれ武士の

森迫三十郎親正

道をば誰もかくやおもはむ  
森迫三十郎は、豊後国大友の幕下森迫兵部允親数の子なり。肥後の国人合志伊勢守と戦ひの砌り、親正わづか十七歳、常に優美にして文武の心がけ深し。其日の出立には、白糸緘の鎧に鉞形の兜を



着し、手荒き馬に打のり、敵を駆散らし、合志方  
山本十郎と戦ひ火花を散らせしが、組打となり、両  
馬が合に落けるが、なんなく山本を組敷しに、彼が  
良等走付て、親正の草摺をたゝみ上二刀さしけれ  
ば、たゞよふ所を山本はねかへし、つひに三十郎は  
討れにけり。親正が兜の立袖は三本菖蒲の中に金  
の短冊ありて、此命よりの歌を書つたり。此首実  
檢の折からは是を見し人へ感涙をながし、惜まぬも  
のはなかりしとなん。

66 澄月のしばし雲には隠るとも

大島民部澄月

己が光りは照さざらめや

大島筑前守照屋

67 かりそめの雲隠とは思へども

惜む習ぞ在明の月

大島民部澄月は、松浦老岐守隆信の旗下にて、兄

筑前守ともろとも肥前の飯盛を攻んと出陣に及

び、松浦の下知にしたがひ、先相神浦の城へ押寄、

度々戦ふといへども、城兵強くしてさらに弱るけ

しきなきゆるゑ、寄手は武辺といふ所に引取て、数日

陣所を固て居しに、城兵兵糧とぼしく、すでに飢

喝にのぞみければ、今は最期と思ひ定め、城將東  
甚介斎忠三百人ばかりにて打出、精兵共に射たてさ  
せ怯む所を蒐立ければ、寄手難義に及びくり引に退  
けるに、大島兄弟殿して度々返し合せ敵を追払ひ  
けれども、軍急にして味方多く討られければ、大敗  
軍となる。大島兄弟雑兵の手にかゝらんよりは、い  
さぎよく自害せばやと二人リ打つれ、小高き所にの  
ぼり、民部兄にむかひ、最期の辞世はいたしたりと  
此澄月の歌を見せければ、筑前守も矢立取出し、  
へかりそめの歌を書に、弟民部は莞爾と笑ひ、  
もはや刀を胸板に突立て死す。照屋、さらば弟が  
用、合戦せんと、寄くる敵を山より追下頬当引切て  
自害せんとする所に、敵方の勇士、北川兵部といふ  
者馳来て、「筑前殿御首を給はらん」と言葉を掛た  
り。大島照屋あざ笑て、「身石火の風に向つて滅安  
きが如く、朝露の日にむかひて消やすきに似たり。  
心得たるか兵部」といひて、刀を咽へ突通して死  
す。後此軍勝敗決せず扱ひとなり、和睦しぬれど、  
大島兄弟の名は後につたへて、敵も味方も誉ざる者  
はなかりしとかや。

三村修理亮元親

68 人といふ名を借るほどや末の露

消てぞかへるもとの雲に

三村元親は備中松山の城主なりしが、毛利家と弓矢に及び、籠城年をかさね堅固なりしが、兵糧乏しく降参する者多く、城の保難きを知て、城外松連寺に退き、敵方より檢使を乞て切ふくす。最期に筆を染、親友細川藤孝の方へ、  
「一トたびは都の月とおもひしに  
われまづ空の雲がくれして  
竹田法印は親類なれど、戦国の隔に文通のみに  
対面せねば、  
「このものはつてのみ聞いていたづらに  
此世の夢よあはでさめけり  
又大庭加賀守兼賢は和歌の師にて、深き情を通ぜし人なれば、  
「このしおくことは草のかげまでも  
あはれをかけて君ぞとふべき  
人といふの歌は辞世、又位牌に書付しは、  
「思ひしれ行かへるべきみちもなし  
もとのまことをそのまゝにして

大江元就

69 青柳のいと繰返すそのかみは  
誰小手巻のはじめなるらん

大江元就卿は、関東執権大膳大夫広元十五代の孫にて、無双の良将なり。始め芸州半国より武略を以て次第に国を切取、陶尾張守全薑の勢ひ強大なるをも、謀略にて厳島へ引出し、悉討亡し、尼子を始め中国を切なびけて、十州の太守となる。  
ある夏尼子攻の時、軍勢を引て夜に入りぬるに、是より先へ味方決して押すまじと止ける故、諸將不審をなす。元就卿宣ふは、「此川下の螢を見るに、その光り一丁ほどつゞきたり。其中の絶たるは、まさしく人の渡りしに違ひはあるまじ」と見に遣さるに、果して木の茂に伏勢ありけり。諸人その明智を感じず。  
青柳の歌は『集外歌仙』に入。又ある春農業の苦を思して、  
「ちる花を詠ずもしや里人の  
たゞ春ごとに小田かへすらん

70 暗きよりくらき道にも迷はじな  
手友梅

心の月のくもりなければ

友梅は、備中国手の村国吉の城主手右京亮政親が子にて、天正二年十二月毛利家の勢と戦ふころは、友梅眼病にて盲目となれり。弟の新四郎政貞、とても軍に利なきことを見きり、五十余人打出死もの狂ひに働き、敵あまた打取り深手を負けれども、少しも屈せず敵將栗屋彦右衛門と戦ひ、終に討死しなければ、友梅今は是までなり、弟に追付んと良等坂下彦六郎が肩にすがり、敵中へ蒐入、「我首取て見よ」と呼はりながら、大太刀にて盲打に働き、終に木原次郎兵衛は討れて死す。坂下彦六郎も同枕に自害して死せり。友梅竹の枝に短冊を付、此歌を書さし物として軍中に死すは、ためしすくなき盲人なりと、皆感涙をもよほしけり。

甫一檢校

松山に消なんものを末の露

落ても水のあはれうき身は

甫一檢校は京都の座頭遠都といひて、平家を語り、和歌を嗜ける者にて、義昭公御前へも召れし者也。

然るに都争乱によつて、將軍も西国へ下向のよしゆゑ、甫一も備中松山に下り、三村元親の憐を

受て句当になり、又檢校をさへ極め此比京にありしが、松山の兵革をきき、其恩を得るもの何ぞ義に命を捨てらんや、と松山に下り、元親と死を共にせんことを願ふ。元親大に感じ、「心ざしは至極せり速落よ」と言けれどもさらに用ひず。いかにもして助ばやと思ひ、馬酔丸丸といふへ遣し置けるに、この丸の者ども心變して敵を引入レ騒動に及びければ、甫一怒り、「腹だちいひがひなきやつ原なり」と罵り、今は是までなりと、辞世に此歌を残し、自害して果けり。義をしらぬもの共に対しては、これ等も英雄といふべきものなり。

志水伯耆守清久

いかにせん秋のたのみもかれはて

露のみひとつおきぞ煩らふ

志水伯耆守清久は、八郎為朝の末にて足利家の臣也。都六条の軍に宗三といふ者を討て、其首供養の手向に、

へうらむなよ勝も負るもあだし野の

つひには消える露の人の身

公方義昭公没落の後、細川藤孝卿に仕へ、軍忠ありしゆゑ、忠興候手づから鎧を給はりて賞し給

ふ。然るに戦国の習ひ、軍功高きを忌て君臣の中を隔る者あり。故に虚名を受けて、田辺を退く良党十余人共に流浪して清久を助養ふ。其比列候より禄を厚ふして招くといへども、再主の望なく息二人を加藤家に奉仕させ、その身は都東山に寓居して無実の解ざるを愁ひ、此歌を詠ず。細川侯疑ひとけて召かへし給ふ。清久無明の闇はれて再勤し忠誠厚ければ、大禄を給ひ、豊前中津の城を守らしむ後、入道して宗加と号し九十六歳にて卒す。

白子左衛門

73 武士の山路わけ入小手の上の露にもやどる夜半の月影

白子左衛門は濃州の者にて、織田信孝に仕へしが、天正七年の比、羽柴筑前守中国攻の折から、播州三木の城をかこみ、赤松の氏族別所長治を退治せんと対陣におよび、白子左衛門寄手にありけるに、彼は風月の才ある者なれば、秀吉召出し給ひて、「陣中の徒然何か狂歌にても詠候へ」とありければ、左左衛門とりあへず、

へはりまなる三木赤松を切捨て  
羽柴ぞ山の太木となる

此狂歌をよむ。はたして此城落ければ、秀吉大きに喜感ありて、手づから酒を給はり、さまざまのひきで物をとらせ、其後度々召出されて、おもひのほかなる富貴の身となりしといふ。

別所小三郎長治

74 今はたゞ恨もあらじ諸人の命にかはる我身と思へば

別所長治は播州三木の城主にて、智勇ある将也。天正五年より三年の籠城に防戦油断なく、毛利家へ後詰を乞ふといへども、自国の軍勢に隙なき故延引せり。されども中国より兵糧運送して、魚住といふ海辺より取入れければ、城中屈する色なし。秀吉これをしり給ひて、「この城力責にて落べきやうなし、糧攻にせよ」と魚住と三木の間に向城を築き、道を断切ければ城中難儀に及び、必死の戦ひすれども味方に討死する者多し。

天正七年十二月に至り、糧尽て牛馬を喰ふまでになりければ、長治伯父山城守、弟彦之進と談じ、「われら三人切腹して士卒を助ばや」と此よし秀吉へ言入ればこと定りて、同八年正月十七日此歌を残て切腹に及ぶ。長治の妻も筆を染、

へもろともに消はつるこそうれしけれ

おくれさきだつならひなる世に

⑦命をも惜まざりけり梓弓

別所彦之進友之

末の世までの名をおもふとて

彦之進友之は、其日朝より士卒を集め、酒肴を  
与へ三年籠城の功勞を謝し、忠節を賞美し、いと  
まをつけ其身も一獻汲て、思ふまゝ舞たはぶれて、  
本城客殿に敷皮布せ、兄長治と盃取かはし、此  
歌を書のこし腹切て死す。長治の妻もかひぐしき  
女なれば、夫に後れじと三才の児を刺殺して、同  
じ枕に自害す。廿一才浦上宗景の女なり。彦之進  
友之の妻は山名豊恒のむすめなりしが、懐胎にて  
産月も近く、産落して顔見んと思ふに、かひなくけ  
ふとなりて、長治の子の目前刺殺さるゝを見ては、  
「吾身の産さるも一ツの悲は遁れたり」といひな  
がら、暗よりくらきに迷ふ罪をかなしみ、泣々夫  
におくれじと、

へたのめこし後の世までにつばさをもち

ならぶる鳥の契り嬉しき

此歌をのこし十九才にて自害して果けり。

三宅肥後入道治忠

⑦君なくばうき身の命かせん

のこりてかひのある世なりとも

三宅肥後守治忠は別所長治の老臣にて、忠勇の  
人なり。切腹の定日時刻近づきしに、長治の伯父  
山城守いまだ見えざれば、三宅心ならず思ひ使を  
走て、「かねて定候切腹の時刻只今に迫て候。詎  
おくれさせ給ふ。いそぎ御入来、最期の式をも先  
立て御覽に入し候はん」と申送りけるに、山城守こ  
れを聞て、「万卒の將のため命を抛は日比の恩  
の報ひなれば、誰か恨ん、迎も叶はぬ時なれば、  
おめく敵に渡さんより城に火をかけ焼捨て死ん  
ど其用意なりければ、斯させては大将長治の盟約  
偽りとなるのみか、万卒も命を落すべしと策て、  
山城守を討取長治にこの事を告げれば、能こそせし  
と悦びて果ければ、三宅入道介錯してのち腹十文  
字にかき切、殉死して果る。此歌は其時の辞世なり。

武田勝頼

⑦夏山の遠き梢の涼しさを

野中の水の緑にぞ見る

武田勝頼は信玄の四男にて諏訪頼茂の跡目なるが

ゆゑ、武田相伝の信の字は名のり給はず。されど信玄陣代の比より、諏訪法性の兜は譲られしといふ。勝頼勇に任せ臣の諫を用ひず。智臣は退き、佞人どもの進むゆゑ変心の者多し。天正十年三月、軍破れて天目山に落ける時、土屋宗蔵馳来て、「君は新羅殿より廿八代弓矢の家を継せ給ひて、今際に及びて一揆ばらに首を渡し給ふは口惜」と諫ければ、尤なりと土屋に介錯させて果給ふ。此比秀吉中国にありて、勝頼討死して甲州平均と聞、大息ついで、「あたら人を殺したること、残りおほきことなり。我甲斐の軍中にあらば、強くいさめて勝頼を助け、甲斐、信濃をあたへて味方とせば、東北の国々に心置なかりしに」と落涙してをしまれしといふ。

織田信長公

〔8〕さへのぼる月にかゝれる浮雲の

すゑ吹はらへ四方の秋風

織田信長公は備後守信秀の二男にて、尾州より出て武名を諸國に轟す。越前より義昭公を迎へり、足利家再興の補佐と号し、先佐々木承禎、三好の一類并に伊勢を攻どり、山門根来の悪僧を討、浅井、朝倉をも平らげて上洛し、官位昇進して

譜代被官にも叙爵を給ひしころ、京中の者献上物ありて、信長公の勝利を賀す折から、連歌師紹巴も恐悦に出、扇子二本台にのせ御前ににさゞげ、かしこまりて紹巴、

へにほん手に入るけふのよろこびト  
申ければ、信長公喜悅あり。言下に、  
舞あそぶ千代よろづ代の扇にてト  
附させ給ひ、紹巴にひきでものあまた給はりし。

人／＼是をきく、只荒々しく鬼の如き大将とのみ思ひしに、優美の事も優れ給へりと感賞せしとなり。

松田平介勝忠

〔9〕そのきはに消のこる身のうき雲も

つるにはおなじ道の山風

松田平介勝忠は信長公の近臣也。天正十年五月下旬三好の残党を責よと、丹羽五郎左衛門、戸田武蔵守坂井与右衛門等に三千余の勢をそへ、泉州堺より四國に渡すべしと下知せられければ、一同勢揃へをなし押出すに、信長公急に松田平介を使として堺へ下し、丹羽等の諸將に告て、四國へ渡海に及ばず、其勢を以て不意に紀州鷲の森に押し寄せ、本願寺門徒の油断せしを攻つずすべしと申付られ、

その外内密の策をさづけ、紀州へ遣しけるに、急立歸來りし所、はや本能寺にこと有て、信長公御最期、信忠卿も生害ありし跡へ走付、軍はてける故力及ばず。平介無念の齒がみをなし、妙頭寺にいたり此歌を書のこし、腹十文字に搔切て義名を後の世にのこしぬ。

吉川経家

⑧武士のとり伝たる梓弓

かへるやもとの栖なるらむ

吉川式部少輔経家は毛利家の将にて、因州丸山の城に籠り数百日の防戦に勇を顕しけれども、中国の後詰延引し、兵糧難義におよぶ。羽柴勢、これを察し、使者を遣して、開城を進む。経家切腹致すべき儘、諸士を本国へ歸させ給へと言送るに、秀吉答に、切腹に及ばず。経家をも助けんよしを申送るといへども、経家死を望て、盟約の書を乞ひ、検使を申請、切腹の式法嚴重にかまへ、家臣静間源兵衛に向ひ、信長の実検に入る首なり。よく心を付、介錯致すべきよし言ふくめ、此辞世を書のこし腹かきさばき首さしのべて、「打」と云けるに、静間主君に刃向ふ悲しさに討かねるけるを、経家弱る

けしきなく、「ばか者切ざるか」と笑ひて討られる。その勇威を感じ、実検の後、厚葬りしといふ。

清水長左衛門宗治

⑨浮世をば今こそ渡れ武士の名を高松の苔にのこして

清水宗治は毛利家の勇将にして、備中高松の城主也。秀吉数度これを攻るといへども、勇威盛にして、力戦には落難を悟り、地利を見るに、高松は小高のみの平城なれば、水攻にしかずと城の西より南へまはし、一里の間広サ三十間の堤を築せ、盤石をたゝみ、上兄部川の流れを堰入。折ふし五月雨ふりければ、溪水流れいりて、洪水をなし、城中水にひたして忙然たる時、秀吉和義の使ひを遣し、城将宗治切腹せば和睦して陣を引べき旨言送れと、元春、隆景、和平致すとも、忠臣を切腹させんこと本意にあらざと領掌なければ、使ひの僧安国寺、此よしを清水に告げるに、涙を流し、「義将の両川を憐給ふこと忝、我切腹せば士卒助り、和義調ひ、国家治平の基なり」と悦び、検使を乞ひ、此辞世を残し、兄月清とともに切腹して義名を世々に伝けり。

川上左京

82 うちむすぶ太刀の下こそ産屋なれ

唯切かゝれ先は極楽

筑紫晴門

83 さらば切れ刃にかゝる物もなし

本来心にかたちなければ

川上左京は薩州島津家の臣なり。秋月孫左衛門種

実筑紫広門に遺恨あるによつて、島津勢をたのみて

天正十四年七月六日、筑前御笠郡勝の尾の城へお

しよせ攻戦ふ。又島津勢、広門の舍弟美濃守晴門

の籠たる一久瀬の城へ取掛り、一時責に操立てける。

城将晴門こゝを専度と防ぎけれども、大勢入レかへ

攻付ければ、既に落城に及ばんとす。美濃守晴門防

戦の術尽て今はこれまでと思ひきり、軍神へいと

ま乞ひの一戦して花をちらし、閻魔王への娑婆土産

にせんと、荒き馬にうちのり大太刀振て切て出、ま

たゝく間に数十人切伏、猛威をふるつて働く折か

らに、薩戸勢の中より川上左京わたり合、数度切む

すび火花を散らすに、勝負はさらに附ざりける。然

る所に川上左京戦ひなかばに笑をふくみ、打む

すぶの歌をよみかけければ、筑紫晴門これを聞て面

白しといふ詞の下より、さらばきれの歌を返しと

して互ひに火になり水となつてしばしがあいだ戦ひ

けるに、左京が打太刀晴門の高股へ切込ければ、晴

門も左京が足を難倒せば双方ともに尻居にどうと

たをれにけれど、互ひに聞ゆる勇猛なれば深手もい

とはず組付て兩人等く声をかけあひ、さし違へて

ぞ死したりける。かゝる烈しき場にいたり、生死の

街にありながら、敷島の道に心をこめて、骸は

戦場の土となるとも、其名は末世に残しつゝ、敵

味方の感涙の種とはなりにけり。

高橋紹運

84 流れての末の世遠く埋れぬ

名をや岩屋の苔の下水

三原紹心

85 打太刀のかねの響は久かたの

あまつ空にぞきこえあぐべき

高橋紹運は筑前岩屋の城主にて武勇の将也。天正

十二年島津勢十万余騎、大友を攻て猛勢なるに、岩

屋の城へ使者を立て申けるは、紹運の武勇世に名高

しといへども、かくては衰られんこと近きにある

べし。とにかく家を興ん事、武の本意とす。早く

島津家と和睦せられ人質を出され然るべき由申送



りけるに、紹運聞て尤の仰に候へども、運衰へて志を変ずるは、弓矢取身の恥にして人に爪抓きせらるべし。松樹千年終に朽ることぞかし。人生朝露の日影を待にひとし。只世に残らんものは義名也とさらに取合ねば、さらば攻よと大軍を發し押寄せれば、數日防ぐといへども、七百余の小勢なれば、敵しがたく討死と覺悟し、門の柱にへかばねをば岩屋の苔にうづむとも

雲井のそらに名をとどむべき

書付て一度敵を追払ひ心しづかに切腹せんと高矢倉に打上り、其用意せしかば、義の深き將を慕ひ、同じ枕に切腹する者三十七人へ流れてのゝ歌は此時の辞世也。紹運の骸は薩州より厚葬り給ひしとかや。三原紹心も岩屋の城一方を引うけ防戦手を尽しけるに、四方十余万の寄隊山野礮路に充滿して、天地も崩るゝばかりにときを發し攻ければ、城兵一人して五人十人打といへども打死する者、數増りける。三原紹心花やかにいで立て、四尺五寸の大太刀を真向にさし挿し、持口に立添て、大音に此辞世を吟じ、むらがる敵中へ蒐入て當るをさいはひ切ちらし、敵あまた打とれども、其身金鉄ならねば、數所の手疵を負ひ、今は是までなりと向ふ敵と引組て

深き谷へ転びおち重り合て死したりける。

86 世の中を廻りはてぬる小車は  
佐久間盛政

火宅の門を出るなりけり

佐久間玄蕃允盛政は柴田勝家の甥にして、大勇強の武者也。常に鉄の棒を遣ふ事に馴たり。天正十一年四月、賤ヶ岳へ取掛り羽柴勢を切崩し敵陣を數多燒ししかば、さしもの中川清秀も討死ありしかば、盛政勇にほこつて打とる所の首を持せ、勝家方へおくり、勝利の吉事を言のべ、その上盛政賤ヶ岳の陣所を去らず、爰に在陣をすべきよしを注進すれば、勝家「さありては軍に利なき事をしりて少利にほこらず、いそぎ引上候へ」と使ひしき波を打て諫れども、強氣の盛政返答もせず、然るに其夜、子刻に秀吉公着陣ありて、翌朝敵を眼下に見おろし攻かけければ、忽ち北国勢敗軍に及び、盛政終に生捕となり、最期の辞世に此歌をよめり。

柴田修理亮勝家

87 夫ぞとも人にしられず憂ものは

身を心ともせぬ世なりけり

柴田勝家は、織田家の老臣にて、越前北の庄の城主也。軍功者にして、魁に名を得る。されば其時代の小唄に、木綿藤吉米五郎左、かゝれ柴田に退佐久間と謡ひしとなり。木綿は何に用ひても調法なる物ゆゑ、木ノ下にたとへ米はなくて叶はぬものゆゑ、丹羽に比し柴田へ勇氣盛んに駈、口よきゆゑ斯いふ。又佐久間信盛は退口上手ゆゑなりといふ。平日勝家軍令を伝へるに歌を以てす。その中二、三首をしるす。

だんくんに人数を押ど先勢を

とりかためずはつぎをくづすな  
敵の退くところへつかばくひつきて

追はゞ逃たりにげばおふべし  
陣とりはいづくなりともきを付て

日くれぬさきにあたり見ておけ  
合戦に勝てかぶとの緒をしめて

追ふも二のみも場や時による

神戸信孝

88 たらちねの名をばくださじ 梓弓

いなばの山の露ときゆとも

信孝は織田信長公の三男なり。永禄十一年、信長

公、伊勢の神戸をせめて、その一族下総守と和平し、信孝十一歳也しを、彼家の養子となし、伊勢を領し後、美濃に移る。然るに天正十年六月、本能寺の事ありてのち、信孝英雄の挙にして、明智退治の功すくなからずといへども、秀吉三法師丸を立て、信孝の功を賞せず。此ゆゑに信孝快からずありし所、柴田勝家北国に兵を起す。信孝是に合体して軍議つたなからずといへども、柳ヶ瀬賤ヶ岳の敗軍より、柴田、佐久間もほろび、世にあるかひもなき身とかこち

へ身はかくて入ぬる磯の草なれや  
ありとも人に見えずはてなん

運つたなく尾州野間の内海にて自害ありし。生年  
二十六歳なりけるとなん。

筒井順慶

89 筒井筒つゝゐの底の清水かけ

結ぶ手多きけふの明雲

筒井陽舜順慶は、筒井浄妙の末、筒井大夫順

武より応永以来武事をもつて大身となり、和州筒井の城主にて七十五万石を領せり。天正四年、松永

弾正織田家を反て、信貴の城に籠る。織田勢数万

にて攻けれども、要害の城なれば、たやすく落すべきやうなし。此時順慶策をめぐらし、軍士二百人大坂本願寺より加勢なりと披露し、信貴の城に入らせ惣攻の折から城に火を掛させ落城に及ぶ。信長此功を賞し、大和一ヶ国を給はる。又明智光秀本能寺合戦の後、大和、紀伊、和泉三ヶ国を送らんと味方に招ぎけれども、是に応せず、八幡山に備へて山崎合戦の砌、淀川辺にて明智が兵五百ばかり打とり、功を顕しければ、元のごとく大和一ヶ国領し、天正十二年八月病死す。

#### 山名禪高

⑨名ばかりは沈もはてぬうたかたの

あはれながとの春のうらなみ

山名豊国は因幡の国久松の城主にて、毛利家に属してありしかど、羽柴秀吉、中国攻の時、同意せしかば、家人どもは毛利家を放れしをうとみて、離散せしゆゑ、其身も斯て世を遁れ山家に住し、法体して禪高と号す。ある夜中盗人大勢乱入して、禪高を討んとせしを、鎧おつ取て老法師が手並を見せんと大勢にわたり合いどみ戦ひし所、禪高が妻心利たる者ゆゑ、物蔭に身をひそめ、衣服を多持出し、

賊の劍戟に投かけて纏ふこと度々なれば、賊どもはたらし自由ならず、たゞよふ所を禪高踏込で賊多く打取、二人生捕て市中に引ければ、皆人山名夫婦の者を誉恐れけるとなん。此歌は秀吉九州攻の時、同伴にて長州あみだ寺においてよめり。

#### 北畠信雄

⑩嬉しさのありとや人の思ふらん

憂をうきとも歎かれぬ身は

北畠信雄は織田信長公の二男也。織田勢永禄十一年大河内の城を攻、やがて和義をととのへ信雄十二才にて北畠信雅の女に配して彼家の家督となり門葉榮し、天正四年、北畠一族皆ほろび失しのも、位階昇進して暫時ときめくといへども、信長公本能寺の変の後日々衰へ挙用するものなきゆゑ、無念に思ひ、秀吉と鉾楯におよび、一戦の後、和平になりけれど、豊臣家、武威盛んなる比はかすかなるさまにて、京に住居し昔にも似ず静なるに、侘つゝ述懐の心にてこの歌はよめり。北畠准后親房卿より十四世の孫に当れり。墓は京都盧山寺にありて高照院殿と号す。

日下部與助元五

② 武士の矢竹心を異国の

はてのはてまでしらせけるかな

日下部元五は、志水伯耆守の息男也。ゆるあり

て加藤清正に仕ふ。朝鮮陣の時、清正兀良哈を攻

落す、元五首級を取、功有。然るに清正地利

を計て急に軍勢を引揚る折から元五が傍勢戯て

「和どの日は比歌を好まれ候に、斯るせはしき場に

ても詠るゝや」と言ければ、元五聞て異国なりとも

我國の詞を残さんと筆をとり、あたりの白壁に此

歌を書のこし、又蔚山籠城の時、明の大軍に囲れ、

夜半も油断なく塀裏を廻り味方を励し眠もやら

ず、雲氣烈しき折から、

へさむけさは鏝のそでに霜を置いて

さえゆく月のあけがたのそら

関ヶ原御陣の後、小西の居城肥後の宇土を攻し時、

元五一番鎧の功あれば、清正感状に脇差を添、加増

を給はる。其後細川侯加藤家に日下部與助を乞得給

ひて志水新之允と改名させ、父と共に中津を守らし

む後、伯耆守と号し、九十二歳にて卒す。

金上遠 江盛備

③ 越ぬべき山路をいかにふる雪の

みなれし鏝袖おもるなり

金上遠江盛備は、奥州南部蘆名盛隆の臣にて、勇

猛の人也。使者となり上洛して諸国の使者一同出て

太閤に拝謁せしに、金上いと無骨に見えしかば、御

前の人々批判せしに、太閤人づくに示して曰、「西

国の使者はへつらふ心ありて腰をかざるは倅ごと

なり。会津の使者は蘆名にて一、二と呼るゝ者ゆる

拝礼に馴ず、無骨に見ゆれども無二の勇者なり」と

誉られし人なり。又和歌もよく詠、連歌は紹巴に学

ぶ。あるとき秀吉公の御前にて、

へ女も鏝きるとこそきけ

といふ前句ありしに、「金上は風雅に志あり。附よ」

と仰ありければ、金上畏りて、

姫百合のとも草摺に花ちりて

此付句斜ならず御感ありて、引出もの給はりし

とかや。

④ 名にしおふ長門の海をきて見れば

あはれを添る春の浦波

佐々陸奥守成政

佐々成政は大勇強の大將也。初北国を領せしが、  
天正十六年肥後を拝領して熊本に移制法を定る  
に、隈府の城主相模守親長、下知に應ぜず、成政  
怒て隈府を攻むるに、いまだ戦ひ半に熊本に一揆  
起て留守の城を攻るよし、注進ありければ、成政  
熊本へ引取所、敵跡を追て退口難義なりしが、成政  
一世の勇を震て引上る。此勇戦辺土なるゆゑ世に  
知れざることを成政歎ぜしといふ。斯て国中治平せ  
ざるは邪政なるゆゑと、太閤召給ふ。成政尼が崎法  
恩寺に旅宿してありしに、自害せよと上使の来る  
を、成政驚く気色なく沐浴して検使に向ひ後代の  
物語にせられよと立ながら腹十文字に切り腸を  
掘み出し、天井へ打付しに竜の画に血活のこりて、  
誠の竜の蟠屈する如く末代これを見る者恐怖せざ  
ることなしといふ。此歌は長門のあみだ寺にての詠  
なり。

吉川元長

〔9〕皆人はわたりはてぬる世の中は

吾身ぞもとのまゝの継はし

吉川治部少輔元長は、元春の男にて智勇の大將也。

秀吉と度々手詰の勝負を決せんと勇進れし強威の

氣質也。父元春羽柴の下風に附んと本意なく思ひ給  
ひしや、元長に家を譲り隠居し給ふ。元長も一胸  
襟にておはしけれど、秀吉、吉川を重く用ひ給ひ九  
州陣の時、近年諸所の軍物語をもせん間、せひ  
出陣し給へと宣ふに仍て、九州陣に出馬あれども、  
俄に病氣に悩されければ、弟藏人経信を名代  
として遣され其身は山溪に入、水竹の居に心を清  
し、隠遁の思ひあれば、石見にある舎弟左近將監  
元氏の許へおくり給へる歌に、  
梓弓ひかかれるぞや心にも

まかせはてなばすみぞめのそで  
されども桑門の望もとげず、満齢四十歳にて日  
向の国の陣中にて病死したまふ。

北条氏政

〔96〕まもれ猶君にひかれて住吉の

松のちとせを万代のすゑ

北条左京大夫氏政は、氏康の嫡子也。文武をか

ねたる将にして、よみ歌もあまたあり。松契多春

の題にてまもれ猶の歌はよめり。おなじく松の題

にて

へうつし植し二葉の松のことしより

みどりにこもる春はいくはる

いづく春を契りおきてか住吉の

はま松がえのみさほなるらん

氏政、氏康の名跡を継て一代の間合戦多し。所謂、

里見義弘、するがの今川、上杉、武田何れの敵

にも銚を争へども自国を掠られし事なく、五代百

余年家を治られしかども、天正にいたり上洛延引

のことに於いて太閤の心に違ひ合戦に及び天運に叶

はざる所あるゆゑにや、落城して天正十八年七月

十一日生害の時、辞世、

いふきとふく風なうらみそ花の春

もみちの残る秋あらばこそ

小早川隆景

97 治れる代をこそ仰げ九重の

今宵の月を見るに附ても

小早川筑前守隆景は、元就卿の三男なり。毛利

家三家の内にて、芸州より東南の方を附せられ、九

州発向の時は先鋒の大將たり。毎度戦場に向て堅

きを砕き哀憐をたれて、其智勇朝鮮までも轟せし

将なり。さしも軍慮に賢き秀吉公すら、播州上月、

又は、馬野山対陣杯には、両川の智勇には舌を巻

て陣を払つて退れたり。中国和睦の後は、秀吉公

敬ひしたしむことひとかたならず。此歌は、上洛

の砌り聚楽の御所にて月の宴の折から詠ぜしなり。

その節、太閤或公卿と碁を囲給ひしに、むづかし

き石続にて、いろく御工夫あれども御手につか

へ給ふ。御見物の歴々いかゞせさせ給ふらんと詠め

居たり。その時太閤これは小早川が智恵にてもかな

ふまじと宣ふ。此詞をもつても隆景の英智の程を

押はかりてしるべし。

従二位法印幽齋

98 いにしへも今もかはらぬ世の中に

心のたねを残すことは

細川幽齋卿は文武両道の大将にて、丹州田辺に

在城のころ、敵一万七千の勢を以て攻めかむ。かゝる

騒しき中にも中院通勝卿歌道にて親しき御中なれ

ば、軍中に御訪ひのこと、まめやかにして、幽齋

卿より歌道伝授のこと残りしよしにて、甲冑の儘手

に采配を持、軍の駆引の中にて口伝ありし所へ敵方

より鉄炮しげく打、両卿の中へ玉一ッ落ければ、幽

齋卿とりあへず、

い爰をさしてうつ鉄砲の玉きはる

いのちに向ふ道は此みち

かゝる場所<sup>ばしょ</sup>にても詠歌あること、いみじく世にきこえけり。又『古今集』の秘訣<sup>ひけつ</sup>兵火の道に失<sup>うしな</sup>んことを惜<sup>を</sup>み、禁裏<sup>きんり</sup>へ奉<sup>たご</sup>る時の歌、

へもしほ草<sup>くさ</sup>かき集<sup>あつ</sup>めたるあとどめて

むかしにかへせわかのうらなみ

斯<sup>かく</sup>て勅命<sup>ちちめい</sup>ありて、城<sup>しろ</sup>の罫<sup>かこ</sup>を解<sup>と</sup>せ大敵<sup>たいてき</sup>を

追<sup>お</sup>ひ追<sup>お</sup>ひ給<sup>たま</sup>ふ。和歌の徳<sup>とく</sup>いと尊<sup>たうと</sup>むべきことなり。

藤原政宗

99 さゝずとも誰<sup>たれ</sup>かは越<sup>こ</sup>えんあふ坂<sup>さか</sup>の

関<sup>せき</sup>の戸<sup>と</sup>うづむ夜半<sup>よはん</sup>のしら雪<sup>ゆき</sup>

陸奥<sup>むつ</sup>黄門<sup>わうもん</sup>政宗<sup>せいそう</sup>卿<sup>けい</sup>は、文武<sup>ぶんぶ</sup>二道<sup>にだう</sup>に秀<sup>ひいで</sup>給<sup>たま</sup>ふ大将<sup>だいしやう</sup>にて、又<sup>また</sup>能書<sup>のうじよ</sup>に聞<sup>き</sup>へあり。敷島<sup>しきしま</sup>の道<sup>みち</sup>に心<sup>こころ</sup>がけ深<sup>ふか</sup>く世<sup>よ</sup>に伝<sup>つた</sup>へし古歌<sup>こか</sup>に、

へむさしのは月の入<sup>い</sup>べき山<sup>やま</sup>もなし

草<sup>くさ</sup>よりいでゝ草<sup>くさ</sup>にこそいれ

是<sup>こゝ</sup>にては月の出入<sup>でいり</sup>りはるかならずと思<sup>おも</sup>ひ、此<sup>こゝ</sup>ゝろをたよ<sup>たよ</sup>りとして、

へいづるより入<sup>い</sup>る山の端<sup>は</sup>は何<sup>いづ</sup>国<sup>こく</sup>ぞと

月<sup>つき</sup>にとはましむさしのゝはら

かく詠<sup>よみ</sup>て近衛<sup>このゑ</sup>殿<sup>との</sup>へまゐらせしに限<sup>かぎ</sup>りなく御<sup>ほめ</sup>誉<sup>ほめ</sup>あり

て、月<sup>ゆき</sup>雪<sup>ゆき</sup>を事<sup>こと</sup>として花<sup>はな</sup>のもとにすむ歌<sup>うた</sup>人もおもてを覆<sup>おほ</sup>ふよし仰<sup>おほ</sup>せられける。詠歌<sup>よみうた</sup>数<sup>あまた</sup>多<sup>た</sup>の中に富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>を、

へいつ見<sup>み</sup>てもはじめて向<sup>むか</sup>ふ心<sup>こころ</sup>かな

たび／＼かはる富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>の景<sup>けい</sup>色<sup>しき</sup>を

此<sup>こゝ</sup>詠<sup>よ</sup>たぐひなく思<sup>おも</sup>召<sup>め</sup>て、雲<sup>うん</sup>上<sup>せう</sup>より御<sup>ほ</sup>褒<sup>う</sup>美<sup>び</sup>ありし歌

也<sup>なり</sup>。又<sup>また</sup>逝<sup>せい</sup>去<sup>きよ</sup>の時<sup>とき</sup>、辞<sup>じ</sup>世<sup>せい</sup>に

へくもりなき浮<sup>う</sup>世<sup>せ</sup>の月<sup>つき</sup>をさき立<sup>た</sup>て

こゝろの闇<sup>やみ</sup>をてらしてぞゆく

豊臣秀吉

100 吉野<sup>よしの</sup>山<sup>やま</sup>誰<sup>たれ</sup>とむるとはなけれど

今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>も花<sup>はな</sup>の蔭<sup>かげ</sup>にやどらん

秀吉<sup>ひでよし</sup>公<sup>こう</sup>の武<sup>ぶ</sup>略<sup>りやく</sup>官<sup>くわん</sup>位<sup>い</sup>昇<sup>しやう</sup>進<sup>しん</sup>の事<sup>こと</sup>は人<sup>ひと</sup>の知<sup>し</sup>る所<sup>ところ</sup>なればしるさず。和歌<sup>わか</sup>をもよく詠<sup>よ</sup>給<sup>たま</sup>ふゆゑ、聊<sup>いさぐ</sup>これ<sup>か</sup>を抄<sup>せう</sup>し出す。小田<sup>せうた</sup>原<sup>げん</sup>下<sup>げ</sup>向<sup>かう</sup>に富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>山<sup>さん</sup>を御<sup>ご</sup>覽<sup>らん</sup>じて、

へ都<sup>みやこ</sup>にて聞<sup>き</sup>しはことのかずならで

くもゐにたかき富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>の根<sup>ね</sup>の松<sup>しょう</sup>

伏<sup>ふし</sup>見<sup>み</sup>山<sup>さん</sup>に茶<sup>ちや</sup>座<sup>ざ</sup>敷<sup>しき</sup>をしつらはせて、

へあはれこの柴<sup>しば</sup>のいほりの淋<sup>さび</sup>しさに

人<sup>ひと</sup>こそとはね山<sup>やま</sup>おろしの風<sup>かぜ</sup>

御<sup>ご</sup>当<sup>とう</sup>座<sup>ざ</sup>、夢<sup>ゆめ</sup>によする恋<sup>こひ</sup>、

へ思<sup>おも</sup>ひ寐<sup>ね</sup>の心<sup>こころ</sup>やきみにかよふらん

こよひあひ見る手枕たまくらしのゆめ

世の中のはかなきことをおぼして、

へつゆとちりしづくきゆと消るよの中に

何とのこれる心なるらん

天正十六年四月十五日、聚楽御所じゆらくごしよへ御幸みゆきありて、

和歌の御会くわいに

へよろづ代の君がみゆきになれなれん

みどりこだかきのきの玉水

〔注〕

(1) 「武家百人一首と其の類列の百人一首」(『跡見学園短期大学紀要』第七・八集 昭和46年3月)。

(2) (1) 論文において、伊藤嘉夫氏は当該歌結句を「そらのみだれに」と翻刻されているが、今回は底本の字体から「うらのみだれに」と翻刻した。

―おざき・りようすけ 日本文学科四年生―

―たまだ・はるか 日本文学科四年生―

―ほてはま・りさ 日本文学科四年生―

―みやした・じゆんこ 日本文学科四年生―

―ふじかわ・よしかず 日本文学科准教授―